

Title	関中平原・祝家荘における肥料用土の獲得・利用に関する聴取調査
Sub Title	Interviews on the acquisition and use of soil for manure in Zhujiashuang, Guanzhong plain, China
Author	栗山, 知之(Kuriyama, Tomoyuki)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.85, No.1/2/3 (2015. 7) ,p.457(457)- 502(502)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設125年記念号(第2分冊) 論文 民族学考古学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150700-0457

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

関中平原・祝家荘における肥料用土の獲得・ 利用に関する聴取調査

栗山知之

一 はじめに

黄河中流域の関中平原^①では、極めて多くの土を肥料としてきた。そうした肥料には、「土糞」（土と人畜糞尿を混ぜて堆積・発酵させた肥料）、そして「炕土」（土製オンドルの土）・「老房土」（古い家屋の土壁）・「陳墻土」（古い土塀の土）・「地皮土」（家屋内外の表土）などの「土雑肥」がある。一九七九年の岐山県農村部では、土糞・土雑肥の施用量が「農家肥料」（伝統的肥料の総称）の総施用量の九〇％以上を占めたとされる（楊一九八三）。

土糞は堆積肥料の一種であり、土・人畜糞尿を主とし、草木灰、石炭灰、青草、干草、枯葉、作物茎稈・脱穀屑、食物残滓、飼料残滓、塵芥、生活排水などあらゆる廃物

を加えて製造した^②。土糞は多量の土を含み、養分濃度が低いため、客土の一種とみなすこともある。土糞製造は、関中平原特有の糞尿処理法に由来する。「旱茅」と呼ばれる便所では、水を用いず、人糞尿を土で覆って外気と遮断した。畜舎では、作物茎稈を床に敷き詰めず、床土を毎日敷き詰め直した。便所・畜舎から運び出した人畜糞尿は、土で覆いながら積み上げ、施肥の季節まで貯蔵した。糞尿の衛生管理に乾燥地でも容易に獲得できる土を用いた点は注目に値しよう。また、土の添加は肥料製造の点からも重要な意味を持つ。乾燥地では人糞尿などの有機物を単独で放置しても、その発酵に必要な水分を維持できず、有機態窒素を植物の吸収に適した状態である硝酸態窒素にまで分解させるのが難しい。そのため、有機物に土などの保水材を加えてその醗酵をすすめ、充

分に醱酵させてから施用した。土は保肥材としても機能し、肥料分の飛散・溶脱を防ぐとともに、アンモニウムイオンを吸着してその揮発を抑えた。⁽³⁾

土糞が土以外の原料の肥料分を主に利用したのに対し、土雑肥は土自体の肥料分を利用した。土雑肥はいずれも解体した建材土である。関中平原では、土を主要建材とし、「磚房」(煉瓦製家屋)、「磚坯房」(煉瓦・日干煉瓦製家屋)⁽⁴⁾、「坯房」(日干煉瓦製家屋)、「窖洞」(横穴式住居)、「土墻」(版築による土塙)を建築した。さらに、暖房設備として「土炕」(土製オンドル)を居室に備え付けた。坯房・磚坯房の壁土、墻土、家屋内外の表土は、年月を経るにつれて汚水・汚物由来の有機態窒素を吸収した。⁽⁵⁾それは微生物に分解されて硝酸態窒素となり、硝酸カリウムなど硝酸塩類として蓄積した(中国农业科学院土壤肥料研究所一九六二・一三六)。⁽⁶⁾土炕も使用するにつれて烟道の表面に煤煙を吸着した。土炕本体の建材土や煤煙に含まれる有機物は、加熱によってアンモニア態窒素や可溶性リンにまで分解し、その建材土に含まれる雲母も破壊されてカリウムイオンを放出した(浙江农业大学一九八〇・二五一・二五二)。これらの土雑肥は無機養分を主に含むため、即効性肥料に区分される。

関中平原では、土を建材製作・糞尿処理に用いてから肥料にすることで、農業を永続的に営んできた。農業が二〇〇年以上にわたって営まれた結果、「土墾旱耕人為土(墾土)」と呼ばれる耕作土壌が形成されたといわれる(龚文、一九九九・一三八・一四一)。また、各村落では、建材製作・糞尿処理に要した土を獲得するため、採土場を常設した。そして、長年の採土活動によって、「土壕」(人工的窪地)が宅地周囲に拡大した。

中国農業史研究では、北方乾燥地農業の持続性について、人畜糞尿やあらゆる廃物を肥料源にすることで土壌肥沃度を維持してきたと説明する。しかし、土がその農業再生産に果たした役割には殆ど注目してこなかった。関中平原における土獲得・利用の解明は、北方乾燥地農業を土の視角から捉え直す作業でもある。

こうした背景から、筆者は祝家荘における土獲得・利用の変遷を調査した。観察を主とする成果は既に報告した(栗山二〇〇九)。本報告は、その後の実施した聴取調査の成果である。

対象村落の祝家荘は、陝西省宝鸡市岐山県祝家荘鎮祝西組・祝南組・高家組・王家組で構成される(図一)。祝家荘を含めた周原は、関中平原でもとりわけ大きな土

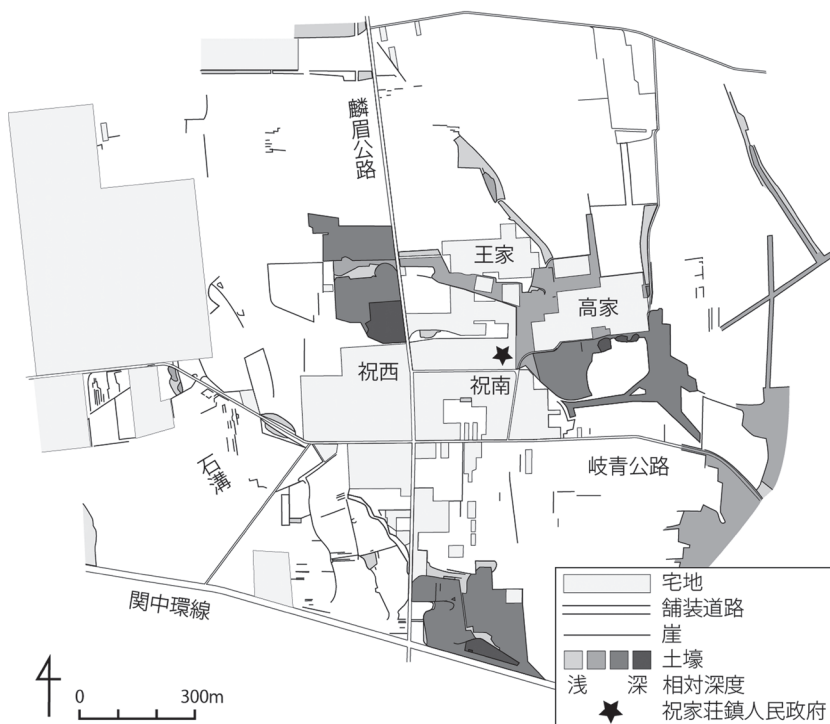


図1 2009年における祝家荘の土壌分布

Google Earthと観察を基に作成。崖は高さ50cm以上を記す。高さ50cm以上の崖に囲まれた窪地を土壌とした。

壕が分布する地域である。周原は周王朝の中心地のひとつだったと同時に、周族の始祖である后稷が農業技術の普及に努めたとの伝説が残る地でもある。そのため、中国農業史研究では中国農業発祥の聖地とされている。また、祝家荘は鎮人民政府を有する鎮区である。加えて、南北に伸びる麟眉公路と東西に伸びる岐青公路が祝家荘で交差する。調査時に開通した関中環線も祝家荘の南を東西に走る。そのため、主要街路には小中学校などの公共機関、工場、商店、飲食店が並ぶ。ただし、祝家荘は近年になって急激に発展したため、宅地・土壌の規模が隣村と比較して際立って異なるわけではない。

聴取は二〇〇六年八月二九日～九月二日（五日間）、二〇〇七年三月二～七日（六日間）、二〇〇七年九月一六～二三日（八日間）、二〇〇

八年九月七～一三日(七日間)、二〇〇九年二月二一日～三月二七日(三五日間)、二〇〇九年七月二九日～八月三〇日(三三日間)、二〇一〇年三月一五日～三月一九日(五日間)の間に実施した。聴取対象は祝家荘在住者A～Fである。彼らはいずれも筆者が直接交流して関係を築いた人物である。通訳者などの協力者は介在していない。聴取は各人の自宅で行い、彼らの語りをその場で記述した。具体的な場所に話が及べば、彼ら自身の手でそれを地図上に記入していただいた。聴取時、聴取対象以外の人物は同席していなかった。

本報告は、そうして得られた情報を筆者がまとめたものである。まず、土獲得を採土場、土利用を建材製作・糞尿処理として項目を設けた。そして、聴取によって遡及可能な一九四〇年代以降におけるそれらの変遷をまとめた。その時期区分は、一九四〇年代～一九五〇年代前半の土地私有制、一九五〇年代後半～一九七〇年代の農業集団化、一九八〇年代～二〇〇〇年代の生産責任制である。上記の項目以外の情報はその他として一括した。

二 調査地概況

祝家荘は関中平原西部に位置する(図二)。祝家荘鎮

の地形は、北部・中部が低山丘陵、南部が扇状地である。祝家荘は北山南麓に広がる扇状地の扇央にあり、地勢が南北に緩やかに傾斜する(図三)。その地質は厚い黄土堆積層から成り、場所によって礫層が混じる。黄土は更新世以降の風成シルトやその二次堆積物であり、極めて侵食を受けやすい土壌母材である。そのため、祝家荘一帯は大小のガリが縦横に走る。ガリの多くは浅く細長いとりわけ大規模なガリは石溝と呼ばれ、祝家荘の西から南を走る。

祝家荘は温暖帯大陸性モンスーン気候の半湿润地域に属し、明瞭な四季を持つ(任一九八六)。一九九八～二〇〇四年における年平均気温が一二・六度、年平均降水量が五九〇・四mmである(岐山县年鉴编纂委员会二〇〇一、二〇〇三、二〇〇四、二〇〇五)。南を渭河と隔てて秦峰山脈と接するため、年降水量は黄河中流域のなかでも比較的多い。ただし、その降水は夏季に集中する。また、一九五七～一九七〇年、一九七一～一九八〇年にかけては、年平均気温がそれぞれ一一・九度、一二・一度であり、年平均降水量がそれぞれ六二八・六mm、六一・二mmである(陕西省革命委员会气象局气象台一九七三、陕西省气象局资料室一九七五、一九八四a、b)。



図2 祝家荘の位置

米国陸軍製図局 1957 年作成の 25 万分の 1 地形図「宝鷄」を改変。

最近五〇年間は気温が上昇するとともに降水量が減少する傾向にあると言える。

鎮政府所蔵の資料によれば、二〇〇七年の祝家荘鎮は、六六・二km²の面積を有し、八の行政村・五七の村民小組から成る。祝家荘鎮を構成する行政村は、小強、範家宮、駙馬荘、岐陽、宮裏、杜城、西莊、戢武である(図三)。祝家荘鎮は戸数五四二戸・人口二一五〇〇人を有する。そのうち、非農業人口は一〇〇〇人にも満たない。農民平均純収入は三〇〇一元である。畜産業については、二〇〇七年末時点の家畜数が牛四六〇〇頭(乳牛二六〇〇頭)、豚二五〇〇頭、山羊四五〇〇頭、鶏五〇〇〇羽である。

祝家荘鎮では、小強の乳牛飼育、駙馬荘の養豚、曹家溝の肉牛飼育、範家宮の総合養殖、岐陽・戢武の養鶏を模範村として重点的に開発していた(岐山年鉴编纂委员会二〇〇四・二三〇)。農業は小麦・トウモロコシの二毛作が中心である。野菜・果物・薬材の栽培も奨励していた(岐山年鉴编纂委员会二〇〇四・二三〇)。二〇〇三年の農地面積は三二〇四九畝(一畝六六六・七m²)である(岐山年鉴编纂委员会二〇〇四・二五九)。主要農作物の播種面積は、小麦二九五〇畝、トウモロコシ一

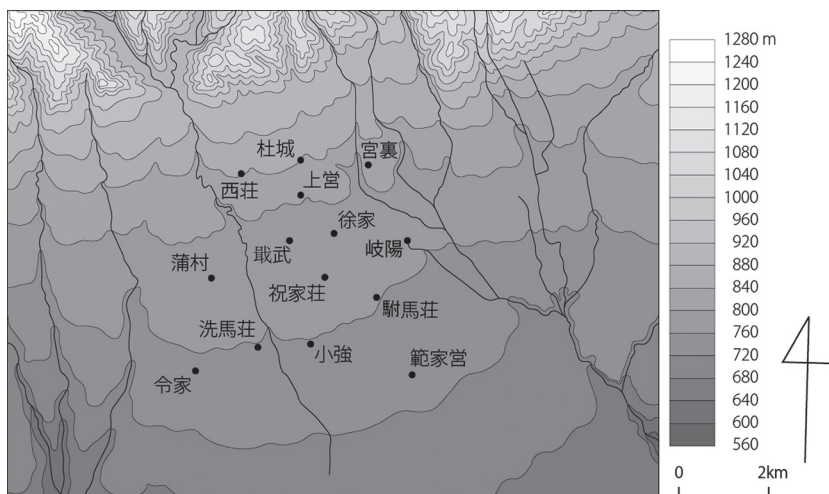


図3 祝家莊周辺

旧ソ連 1976 年作製の 10 万分の 1 地形図「岐山」を改変。地名は聴取で登場した村落を示す。蒲村、令家、洗馬莊を除き、いずれも祝家莊鎮に属する。

三二七〇畝、リンゴ二九〇〇畝、油菜二二〇〇畝、唐辛子一五〇〇畝である（岐山年鉴编纂委员会二〇〇四・二三〇、二六〇）。

祝家莊は小強村に属する（図三）。鎮政府所蔵の統計資料によると、二〇〇七年の小強村は一〇の村民小組、戸数一一四一戸・人口四七三七人を有する。農民平均純収入は三二二四元である。二〇〇七年末時点の家畜数は、牛一三五〇頭（乳牛一二〇〇頭）、豚五〇〇〇頭、山羊三五〇頭、鶏八五〇羽である。また、農地面積は六〇九〇畝である。

聴取によれば、一九四〇年代の祝家莊には、現在の祝西・祝南に鄭氏、高家に高氏、王家に王氏がそれぞれ居住していたという（AEF）。一九五〇年代後半、農業集団化によって、初級農業合作社、高級農業合作社、人民公社が順次成立した。高級社時期の祝家莊には、祝西・祝東の二つの生産隊が存在したといわれる（AEF）。祝西は鄭氏で構成され、祝東は高氏・王氏を中心に構成されていた。なお、祝西生産隊が祝西・祝南生産小組、祝東が高家・王家の生産小組にそれぞれ分かれていたとの証言もある（F）。いずれにせよ、祝西・祝東生産隊は、人民公社化の後も存続した。そして、一九六

一年の人民公社の改編によって、祝西・祝東はそれぞれ祝西・祝南、高家・王家に分隊したとされる（A～F）。一九八四年、人民公社の解体に伴い、祝西・祝南・高家・王家は、生産隊から村民小組に移行した。そして、これらの村民小組は調査時も存続していた。

三 証言

各人が述べた具体的場所は以下の図四～二一に示す。

（一） A家の状況

A略歴（聴取一二回）

祝南在住。一九四〇年生まれ。男性。都市戸籍。Bの従兄。祝家莊小学、岐山一区第一完全小学（岐山県城）、岐山中学（岐山県城）に進学。一九六一～一九六五年陝西師範大学（陝西省西安市）に在籍。大学卒業後は高校教師になる。一九七〇～一九七二年到北京で働き、帰郷後は岐山中学、益店中学（岐山県益店镇）に勤務。二〇〇一年退職。

一九五九年、岐山県青化鎮出身の妻と結婚。三男一女をもうける。長男は湖南省でエンジニア。二男は河南省で公務員。長女は嫁ぎ、西安市に出稼ぎ。三男は甘肅省

蘭州市に出稼ぎ。

調査時、妻と二人で暮らす。耕作請負地二ヶ所・三畝を有し、小麦・トウモロコシを栽培。家畜は飼育せず。

① 採土場

高所、すなわち土壕の崖で採土した。崖では大量に採土できる。農地は平坦なので大量に採土できない。また、崖土は有機物を含まない心土である。農地では養分を含む表土を保全しなければならない。

土壕の崖では、崖下と同じ高さの平地になるまで採土した。採土し終えた土地は、施肥をすれば二～三年後に作物を栽培できるようになった。土壕内の土地は、地勢が低く、水分を保持しやすいので、皆が好んだ。

一九四〇年代～一九五〇年代前半

祝家莊では、全家が私有採土場を有していた。土壕内は各家の採土場が連なっていた。誰でも自由に採土してよい土地や共有採土場はなかった。採土場がなければ土地を買えばよかった。⁽⁸⁾他家の採土場を借りる時は小量の採土に限られた。平地や緩傾斜地で「土坯」（干干煉瓦）用の土を採る家もあった。そうやって採土した場所がいたる所に見られたが、その採土量は少なかった。

A家は柿樹底、南坡、場辺、桑園三ヶ所、太遠、楸樹

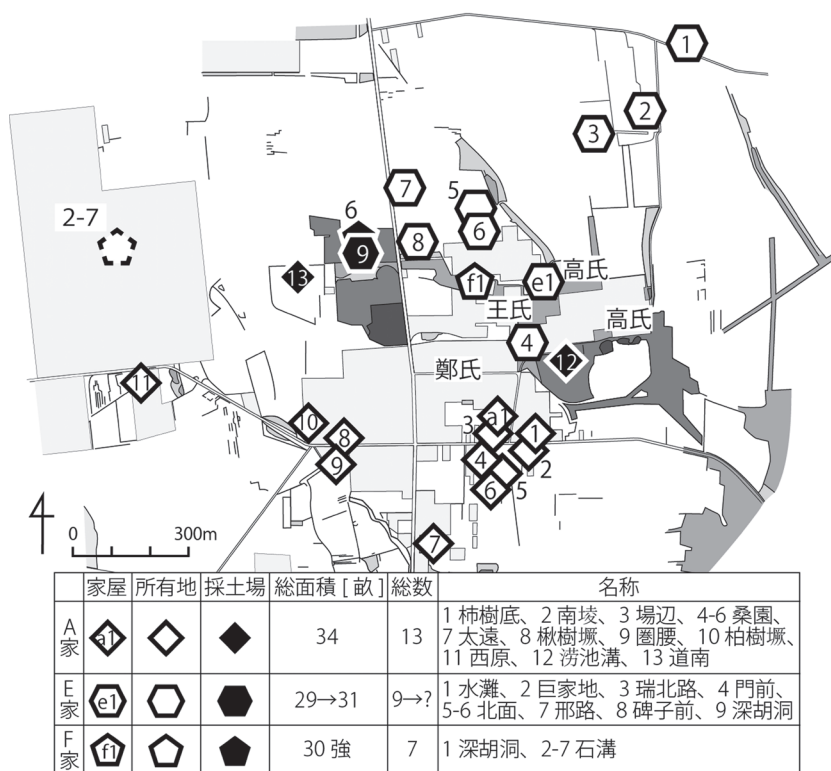
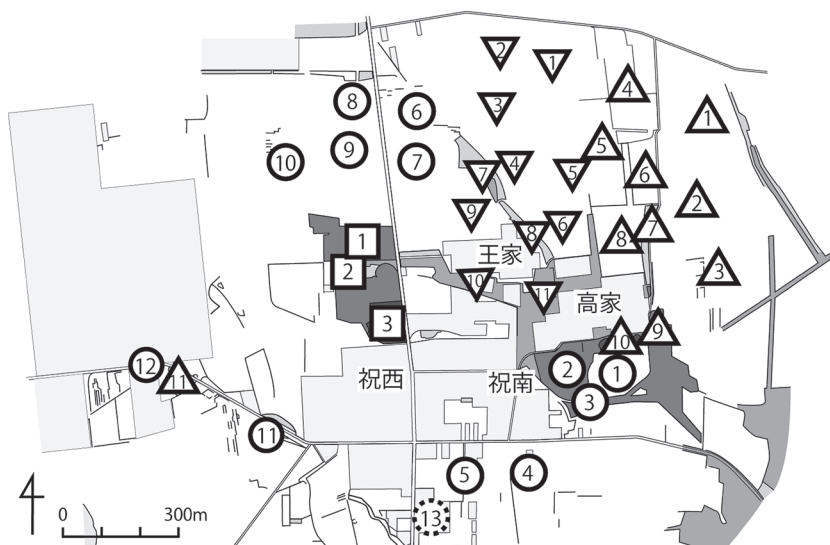


図4 1940年代～1950年代前半の各家の所有地・採土場

聴取情報を基に作成。所有地の名称は各人による呼称。E家の所有地は土地改革で2畝増加、増加分の名称・位置は不明。F家の石溝6ヶ所はセメント工場内にあり、位置を特定できず。

四六四 (四六四)
 塹、圈腰、柏樹塹、西原、湧池溝、道南の一三ヶ所三四畝を有していた(図四・A家一三三)。土地改革の時、A家は中農に区分された。そのため、A家の所有地は変化しなかった。A家の採土場は湧池溝、道南であり(図四・A家一二、一三)、その崖で自家の建材製作や糞尿処理に要した土を自分で採った。崖上も自家の所有地だった。自宅から近い湧池溝で主に採土し、遠い道南で採土することとはあまりなかった。湧池溝で採土する場合は毎日四〇五往復し、道南で採土する場合は毎日二往復した。他家の所有地で採土したり、土を買ったりしたことはな



	総面積 [畝]	地塊	名称
祝南	A 350 B 400	○	1 AB 東埭、2 AB 湧池溝、3 AB 南寺溝、4 B 南埭、5 A 新莊路 /A 場 辺、6 A 新瓜地、7 AB 北面 /A 汽路東 /A 北辺公路東、8 A 深井、 9 A 汽路西、10 A 大土堆、11 AB 南坪、12 A 西原、13 B 電站など
祝西	A 200	□	1 C 深胡同、2 C 講草、3 C 大土場など
高家	A 400 D 380	△	1 D 長征、2 D 水渠、3 D 莊東 /D 東辺、4 D 小頭溝、5 D 西辺井、 6 D 小頭溝的南地、7 D 北溝溝、8 D 莊北、9 D 東壕 /D 南溝、 10 D 南壕、11 D 石溝、D 東辺溝など
王家	A 300 E 200 強 F 280 強	▽	1 EF 榆樹塆、2 EF 徐家門前、3 EF 渠北、4 EF 渠子、5 EF 瓜地、 6 E 上莊莊北 /F 莊北、7 EF 北寺溝、8 E 中寺溝 /F 北寺溝、9 EF 北面 、10 EF 西頭窖 /F 王家窖園 /F 老園、11 EF 小学背、E 石溝など

図5 2009年における各村民小組の農地

聴取情報を基に作成。地塊の名称は各人による呼称。位置不明の地塊は名称のみ。
表中に記載した地塊以外にも聴取できなかった地塊もある。例えば祝西の農地は深胡
洞・講草・大土場のほか、その西側一帯にも広がっていた。1980年代初頭、各地塊は
耕作請負地として細分・分配された。また、祝南の電站には変電所が建設された。

い。
一九五〇年代後半
〜一九七〇年代
農業集団化以降、
祝南は農地の方形
化のため、隣隊と
交錯した土地を交
換した。ただし、
その面積は多くな
かった。祝南の自
留地は、岐青公路
の南側(図五・祝
南四)と祝南正街
の東側にあった。
A家の自留地は岐
青公路の南側に
あった。A家の自
留地の位置はずつ
と固定されていた。
調査時、祝南の農
地は東埭、湧池溝、



図6 1950年代後半～1970年代における各生産隊の採土地点
聴取情報を基に作成。

四六六 (四六六)

南寺溝、新莊路（場辺）、新瓜地北面（汽路東北辺・公路東）、深井、汽路西、大土堆、南坪、西原など三五〇畝だった（図五）。祝南一・三、五一・二）。他小組の農地については、祝西二〇〇畝、高家四〇〇畝、王家三〇〇畝だった。祝南の集団採土場は湧池溝の東崖にあった（図六）。祝南）。生産隊長の指示で採土地点を変えた。宅地に近いほうが土を運びやすいので、まず東崖の北部で採土し、それからその南部で採土した。採土は祝南の集団採土場に限られた。道端の崖や他隊の集団採土場では採土できなかった。

A家は祝南の集団採土場で自家の建材製作や糞尿処理に要した土を自分で採った(図六・祝南)。

自宅近くの平らでない土地(図六・祝南二)で少量を採ったこと

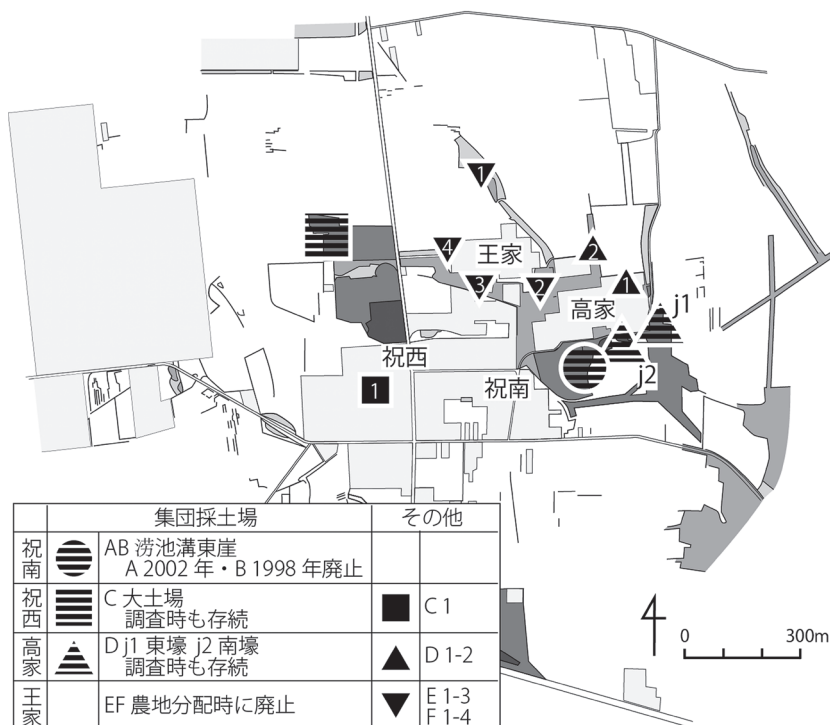


図7 1980年代～2000年代における各村民小組の採土地点
聴取情報を基に作成。

もある。一九五五年に家を建てた時は、当地の切土（図六・祝南二）を建材製作に用いた。自家の自留地で採土したことはない。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

一九八〇年、「包産到戸」が始まった。収穫量が目標量より多ければ褒賞をもらえた。一九八二年、「包幹到戸」が始まった。祝南は人口と労働力に応じて農地を分配した。農地を五等級に分け、皆が順番に肥えた土地から選んだ。その後、耕作請負地の小調整が二〇〇三年まで三年毎に七回行われた。祝南の集団採土場は、農地分配後も湧池溝の東崖に残された（図七・祝南）。祝南では皆がその集団採土場で採土した。作物を植えなければ自家の耕作請負地で採土してもよかった。二〇〇二年に長期耕作請負が始まると、祝南の集団採土場は農地として分配された。集団採土場を廃止したのは、家

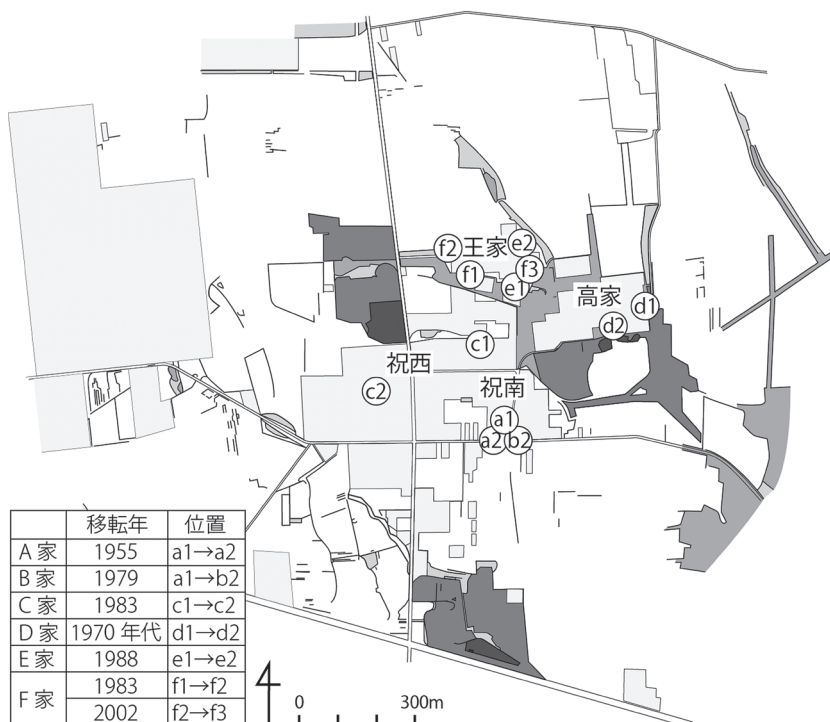


図8 各家の自宅の移転

聴取情報を基に作成。

畜の減少、化学肥料の増加、「水茅」(汲み取り式便所)の普及などで土の需要が減ったからである。

A家は農地分配の際、耕作請負地一ヶ所八畝を受け取った。その後、父母の死去、三男の都市戸籍取得などで耕作請負地が減った。他家と耕作請負地を交換したことはない。調査時のA家の耕作請負地は北面、新莊路の二ヶ所一・三畝だった(図五・祝南五七)。その位置は農地分配から変わっていないかった。

A家は当初、祝南の集団採土場で自家の建材製作や糞尿処理に要した土を採った(図七・祝南)。道端の崖や自家の耕作請負地で採土したことはない。一九九四年に自宅を建て替えてからは、旧家屋の廃材を使うようになり、採土しなくなった。

土の売買は調査時に始まった。それは耕作請負地が長期固定され、皆が土

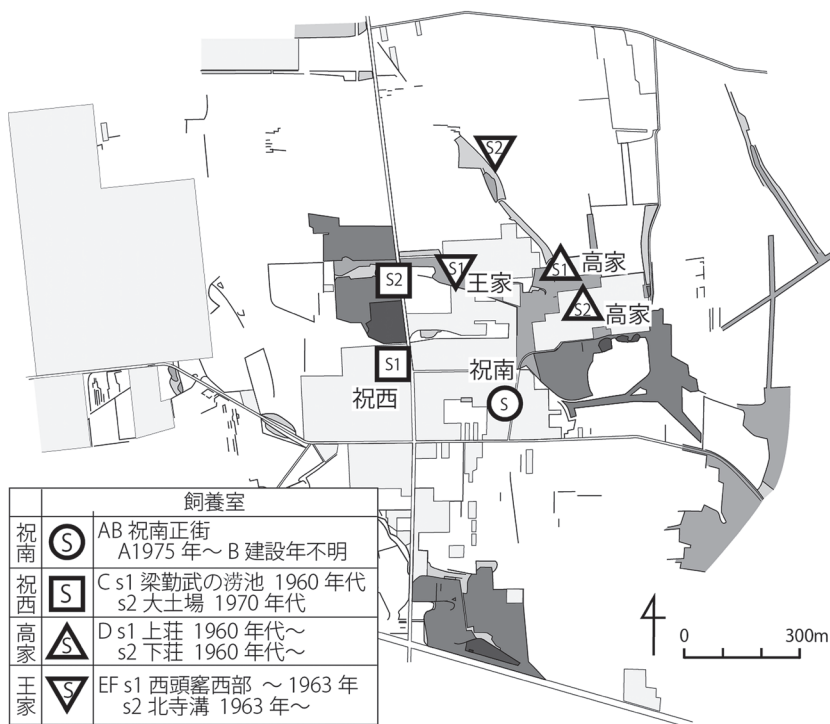


図9 1950年代後半～1970年代における各生産隊の飼養室
聴取情報を基に作成。

地を大切にするようになったからである。さらに、集団採土場の廃止、採土に要する手間も関係した。家屋を建てる家、耕作請負地に崖がない家、土壕から遠い家は土を買うようになった。A家は土を買ったことがない。また、売り手は上宮にいた(図三)。トラクター一台分の土が一五元だった。売り手との関係が良ければ代金を払わなくてよかった。売り手はシヨベルカーで土を採り、トラクターで買い手の家まで運んだ。そのため、買い手は彼らが採土する場所を知らなかった。

② 建材製作

一九四〇年代～一九五〇年代後半

A家はB家とともに祝南正街の坯房(図八・a)に住んでいた。その家屋や土牆を修繕したことはない。

Aを含め、誰もが土坯を作ることができた。「土坯模」(底板のない木製型枠)を平地に置き、土を入れて「錘



図10 その他

聴取情報を基に作成。1 AC 中国通信の小水廠、2 ACF 小強水廠、3 ABEF 五鬼道の瓦窯、4 ABC 湧池溝西崖の瓦窯、5 DF 東壕の瓦窯、6 ADF 下荘の土坑、7 A 浴池の土坑、8 ACDEF 下荘の湧地、9 ACDEF 小学の湧地、10 ACEF 鎮政府の湧地、11 ACEF 梁勤武の湧地、12 AEF 実寿寺、13 ACF 鄭氏祠堂、14 ADF 高氏祠堂、15 ABF 祝南の廟、16 ACF 祝西の廟。中国通信は企業名、五鬼道は5本の道が交差する地点、梁勤武は商店名。実寿寺、鄭氏祠堂、高氏祠堂は農業集団化以降に放棄された。2000年代、祝西・祝南がそれぞれ廟を再建した。

子」(先端に大きな石を取り付けた棒)で突き固めた。それから土坯模をはずし、土坯を乾燥させた。土坯には麦類の茎幹や草木灰を加えなかった。土坯作りの場所は平地ならどこでもよかった。普通は自宅の門前などの自家の所有地だった。土炕は三、四年で換えた。土炕には炕土炕と土坯炕があった。炕土炕は版築で造り、土坯炕は土坯を積んで造った。土炕全体の交換に要した土は、どちらも「架子車」(手押し

車)二〇台分だった。自家の土炕の交換に用いる土は好きな時に自分で採った。二〜三月に土炕を換えたので、普通は自家の糞尿処理に用いる土と一緒に採った。つまり、翌年に土炕を換える場合、冬に例年より多めに採土し、自宅の門前に積み上げた。土炕の交換は、自分で行う時もあれば、人に手伝ってもらう時もあった。土炕の廃材は、土糞の山に加えた。

一九五〇年代後半〜一九七〇年代

一九五五年、A家は現住所に坯房を建てて移った(図八・a二)。その土地はもともとA家の脱穀場だった。家屋の建築に要した土坯は、雨の少ない二〜三月にその対面(現B宅)で作った。土墻の建築に要した土は、一区画あたり架子車五〇〜六〇台分だった。人に手伝ってもらいながら土墻を大量に築いた。

土炕は四〜五年あるいは七〜八年で換えた。土炕全体を換える時もあれば、一部だけを換える時もあった。土炕を換える季節は暖かくなる二〜三月だった。自家の土炕の交換に用いる土坯は、自分で自由に作れた。土坯作りの場所は通常、祝南の集団採土場だった。自宅の門前や自家の自留地でもよかった。なお、A家が最後に土炕を換えたのは一九七八年だった。

一九八〇年代〜二〇〇〇年代

一九九四年、Aが五四歳の時、「磚房」(煉瓦製家屋)に建て替えた。その際、トラクターを一往復五元で借り切って土を運んだ。整地は自分で行った。盛土にはトラクター二五台分の土を要した。煉瓦は戦武の郷営煉瓦工場で生産したもので(図三)、一〇〇〇個あたり四〇〜五〇元だった。建築費は合わせて二一〇〇元だった。

③糞尿処理

土糞造ったのは、土がいたる所にあり、お金がかからないからである。早茅で人糞尿を処理したからでもある。土壕の土自体は有機物を含まない。しかし、人畜糞尿やあらゆる廃物を加えて発酵させることで、土糞は養分を含む有機肥料になった。土糞の土と糞の比率は三対一だった。

一九四〇年代〜一九五〇年代前半

A家は牛・驢馬を一頭ずつ飼っていた。その畜舎には毎日土を敷き詰めた。一回に用いる土量は多くなかった。自家の牛・驢馬の畜舎や便所に要した土は、年間で「大車」(役畜が牽引する荷車)二〇台分¹⁾だった。自家の土糞は年間で大車二〇〜三〇台分だった。自家の土や土糞は、自宅門前の「糞土場」(堆肥場)に積み上げた(図

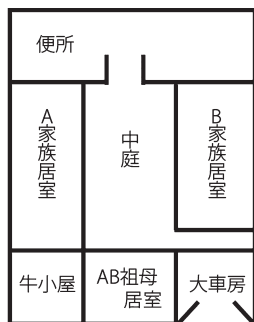


図 11 1940 年代における A 宅の見取図
A による作図を基に作成。

を農地まで運んだ後に採土した。

一九五〇年代後半～一九七〇年代

土糞には極めて多くの土を加えた。当時は出勤率や「双基本（基本出勤天数・基本土肥量）」（出勤日数・土糞供出量の基準）で食糧の配給量が決まった。生産隊に土糞を供出したのは、化学肥料が日本産の尿素しかなく、極めて少なかったからである。ある家では土糞供出量を確保するため、土の比率を四〇五対一に増やし、養分が薄くなった土糞を大量に造った。

一九五五～一九七五年、祝南は旧 A 宅など個人の建物を借りて飼養室にしていた。一九七五年、祝南の飼養室を祝南正街の脱穀場に建てた（図九・祝南）。もし飼養室が湧池溝にあれば、土の運搬には都合がよい。しかし、宅地から遠いうえ、土糞を土壕の外に運び上げたり、飼料を土壕内に運び入れたりしなければならず、余計に手間がかかる。

一一）。
自家の糞尿処理に要した土は、冬に三〇四日をかけ、一年分をまとめて採った。冬は農閑期であり、地面も凍るため、土の運搬に都合がよかった。主に父と祖父が「鍬」（鍬）・「鍬」（柄の長いシャベル）で土を採り、二〇三頭の役畜に大車を牽かせてそれを運んだ。自家の土糞は、旧暦十一月・一月の地面が凍る季節に一〇二日をかけ、自家の農地まで自分で運んだ。土糞の施用量は、肥えた土地に多く、遠い土地に少なかった。通常、土糞

祝南の飼養室では牛・驢馬など役畜を二〇〇三〇頭飼っていた。専任者がそれらを管理した。飼養室に要した土は、毎日架子車二台分だった。飼養室に要した土は、皆で冬の農閑期に一年分をまとめて採った。採土には一〇日前後かかった。一日ごとに交替しながら、毎日十数

人が朝・午後に一〇回前後ずつ往復した。飼養室の土糞は、冬の農閑期に一〇日をかけ、皆で自隊の農地まで運んだ。飼養室の土や土糞は、飼養室の傍の糞場に積み上げた。土や土糞の運搬には、一九六〇年代から架子車を用いた。

A家は豚を一頭飼っていた。自家の豚小屋や便所に要した土は、年間で架子車七〇〇八〇台分だった。自家の土糞は年間で架子車七〇〇一〇〇台分だった。自家の土や土糞は自宅門前に積み上げた。自家の糞場（脱穀場）や自隊の集団糞場に積み上げる家もあった。

A家が自家の糞尿処理に要した土は、冬に一年分をまとめて自分で採った。自家の土糞は、冬の農閑期、飼養室の土糞を運び終えた後に一〇二日をかけ、自家の自留地まで自分で運んだ。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

一九八三年頃、化学肥料は一袋九元だった。また、一九九〇年代からは磷酸肥料も用いた。調査時は炭酸アンモニウム一袋（五〇kg）と磷酸肥料一袋（五〇kg）が合わせて七〇元だった。A家はそれらを一・三畝の土地に年間で七〇八袋施用していた。

一九九七年、小強水廠が開業し（図一〇・二）、便所

を水茅に改める家が増えた。ただし、A家は調査時も旱茅を用いていた。

A家は子どもの学費を稼ぐために豚を二頭飼っていた。毎日豚小屋に土を敷き詰め、汚れた糞や土を取り除き、尿に土をかぶせた。二〇〇二年、出稼ぎで人手が足りなくなり、養豚をやめた。一九八〇年代以降、採土にかかる労力を省くため、土糞に加える土の割合が低くなった。自家の豚小屋や便所に要した土は、二〇〇二年以前が年間で架子車二四台分、二〇〇二年以降が架子車七〇八台分だった。自家の土糞は一九八〇年代が年間で架子車四〇〇五〇台分、一九九〇年代が二〇〇三〇台分だった。自家の土や土糞は自宅の門前に積み上げた。

自家の糞尿処理に要した土が少なくなり、A家は随時自分で採土するようになった。すなわち、自宅の土堆を使い終えるたびに架子車一〇二台分を採った。一九九四年からは旧家屋の廃材を用いるようになり、採土しなくなった。自家の土糞は冬に一〇二日をかけ、自家の耕作請負地まで自分で運んだ。土や土糞の運搬には架子車を用いた。

④その他

瓦窯

一九四〇年代、五鬼道に瓦窯が三基あった(図一〇…三)。そのうちの一基は祝南のもので、他が徐家のものだった(図三)。瓦窯で用いた土はその傍の土壕で採った。その採土量は多くなかった。農業集団化の際、祝南は瓦窯の土地を高家に譲った。一九六一年、祝南は湧池溝西崖に瓦窯を新設した(図一〇…四)。その瓦窯では、河南省洛陽市から来る専任者が手作業で瓦や煉瓦を少量作った。彼らは毎年一〇～十一月に小麦を播いてから祝家荘を訪れ、瓦や煉瓦を作って乾燥させた。そして、三～五月に小麦を収穫してから再度やって来て、それらを焼いた。一九六五年、煉瓦を機械で生産するようになり、湧池溝西崖の瓦窯は閉鎖した。

「平整土地」(農地の水平化)

一九七〇年代、灌漑のために農地の方形化・水平化を行った。祝南の土地では岐青公路と南寺溝(図五…祝南三)の間の土地や新莊路を均した(図五…祝南五)。その際の切土は盛土に用い、建材製作や糞尿処理に用いなくなった。切土に際して、養分を含む表土に注意することになった。一九八〇年代以降、各家は北面や大土堆にある自家の耕作請負地を自分で均した(図五…祝南七、一〇)。

土坑の埋め立て

下莊や浴池には土坑があった(図一〇…六、七)。解放前、どちらの土坑にも所有者がいた。それらの土坑は土や廃棄物で徐々に埋もれた。二〇〇〇年代、浴池の土坑は湧池溝の西崖の土を用いて埋め立てた。

「湧池」(溜池)

下莊、小学、鎮政府、梁勤武に湧池^⑫があった(図一〇…八一～一)。いずれも面積六〇～八〇m²、深さ約1mだった。下莊、小学、梁勤武の湧池は一九四〇年代から存在し、改修したことがなかった。鎮政府の湧池は一九五九年に建設した。その土地はもともと利用されていなかった土地であり、洪水の通り道でもあった。新たに湧池を建設したのは、他の湧池が小さかったうえ、祝南の飼養室からも離れていたからである。湧池の建設にあたっては、方形の坑を掘り、「黄澆泥」^⑬をその側面と底面に敷きつめた。黄澆泥は粒子が細かく、透水性が低い土である。

湧池は解放前も農業社時期も共有のものであった。誰でも湧池を利用できた。祝南では鎮政府の湧池で家畜に水を与え、洗濯し、水遊びをした。ただし、A家は湧池を利用したことがない。湧池の水を灌漑に用いたり、底土

を浚ったりしたこともない。

一九七〇年代、小型水廠で水道水の汲み上げが始まると、皆はしだいに湧地を利用しなくなった(図一〇・一)。その後、湧池は農地に戻り、徐々に埋もれた。一九八〇年代、鎮政府の湧地は劇場や会議室を建てるために埋め立てた。

洪水と土壕

湧池溝はもともと洪水によって形成された(図五・祝南二)。湧池溝の名称は小学の湧地に由来する(図一〇・九)。その湧地は洪水の通り道にあった。北寺溝はもともと更に長く(図五・王家七、八)、農道で分断されるまで洪水が多かった。一九六〇年代末、湧池溝は洪水によって二・三回浸水したことがある。洪水が北寺溝などから湧池溝に流れ込む一方、その傍らで人々が採土し、密洞を掘って住みついた。そして、湧池溝はますます拡がった。

寺溝

一九四〇年代、北寺溝や南寺溝は廟地だった(図五・王家七、八、祝南三)。王家の東の崖上に実寿寺があり(図一〇・一二)、その廟会が土地を二・三畝有していた。

地下水

祝家荘では一九五八年以降、灌漑用井戸を掘った。一九七〇年代からは「機井」(ポンプ井戸)を用いた。灌漑用井戸は五・六回掘った。水源不足によって地下水位が下降し、井戸を次々と放棄したからである。井戸の深さは五〇m、七〇m、一五〇mとますます深くなった。一九九〇年代以降に掘削した井戸は深さ六〇・一五〇mであり、調査時でも使用できた。調査時のA宅の地下水位の深さは三六mだった。小強水廠の井戸の深さは一五〇mだった(図一〇・二)。

(二) B家の状況

B略歴(聴取三回)

祝南在住。一九四六年生まれ。男性。都市戸籍。Aの従弟。一九五〇・一九六〇年に祝家荘小学、一九六一・一九六三年に益店初中(岐山県益店镇)、一九六四・一九六六年に岐山高中(岐山県城)に在籍。文化大革命によって大学進学できず。高校の物理教師になる。一九七〇・一九八〇年に祝家荘鎮範家营村(図三)、一九八〇・一九八八年に岐山高中、一九八八年から益店高中(岐山県益店镇)に勤務。一九八六・一九八九年、教職の傍ら、陝西教育学院に在籍。二〇〇七年退職。二〇〇八年

帰郷。

一九七〇年、岐山県青化鎮出身の妻と結婚。一男一女をもうける。妻は一九七四～一九八四年、祝南の婦女隊長を務める。長男は宝鶏市でIT企業に勤務。長女は嫁ぐ。

調査時、母、妻と三人で暮らす。耕作請負地四ヶ所・六畝を有していたが、労働力不足から祝南の他家に一畝五〇円で貸していた。家畜は飼育せず。

①採土場

一九五〇年代後半～一九七〇年代

祝南の自留地は南埭にあった(図五…祝南四)。その位置はずっと固定されていた。調査時、祝南の農地は東埭、湧池溝、南寺溝、南埭、北面、南坪など四〇〇畝強だった(図五…祝南一、二、四、七、一一)。電站も祝南の農地だったが、後に変電所が建設された(図五…祝南一二)。

祝南の集団採土場は、湧池溝の東崖にあった(図六…祝南)。

B家は祝南の集団採土場で自家の建材製作や糞尿処理に要した土を自分で採った(図六…祝南)。自宅近くの平らでない土地で採土したこともある(図六…祝南三)。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

一九八三年、祝南は人口と労働力にに応じて農地を分配した。その際、祝南の集団採土場は湧池溝の東崖に残された(図七…祝南)。祝南では皆が自隊の集団採土場で採土した。一九九八年、土需要の減少によって祝南の集団採土場を廃止して農地として分配した。また、自家の耕作請負地で採土する家もあった。しかし、それは少量の採土に限られた。

B家は農地分配の際、東埭二ヶ所、湧池溝、南坪、電站、北面三ヶ所の八ヶ所四・七畝を受け取った(図五…祝南一、二、七、一一、一三)。その後、B家の耕作請負地は、弟との分家、長男の都市戸籍取得、長女の結婚などで減った。耕作請負地を交換したことはない。二〇〇三年から祝南の他家に耕作請負地を一畝五〇円で貸し出した。調査時のB家の請負耕作地は、東埭二ヶ所、湧池溝、南坪の四ヶ所一・六畝だった(図五…祝南一、二、一一)。

B家は祝南の集団採土場で自家の建材製作や糞尿処理に要した土を自分で採った(図七…祝南)。自家の耕作請負地で採土したことはない。

調査時、集団採土場がなくなり、皆が土を買うように

なった。B家は土を買ったことがない。また、売り手は上宮にいた(図三)。トラクター一台分の土が一五元だった。

②建材製作

一九五〇年代後半～一九七〇年代

B家は、A家とともに祝南正街の坯房に住んでいた(図八・a一)。一九五五年にA家が分家した後もそこに住み続けた。その家屋や土塙を修繕したことはない。一九七九年、現住所に坯房を建てて移った(図八・b二)。それに要した土はトラクターで運んだ。坯房の土壁は、合わせて一〇区画築いた。一区画あたり土坯五〇〇個を要した。雨の少ない二～三月、祝南の集団採土場で土坯を作り、乾燥させてから持ち帰った。土塙は二〇区画築いた。一区画あたりトラクター八台分の土を要した。土塙は木材で土を囲み、錘子でそれを突き固めながら、土を積み重ねて築いた。家屋や土塙の建築は人に手伝ってもらった。

土炕は通常、五～六年で換えた。土炕の交換には土坯二〇〇個を要した。自家の土炕の交換に用いる土坯は、祝南の集団採土場で自ら作った。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

二〇〇三年四月、磚房に建て替えた。その際、水が溜まるのを防ぐため、三〇〇〇元かけて盛土した。

③糞尿処理

昔は化学肥料が少なかったので、自分で土糞を造った。土糞は人畜糞尿と土を交互に一層ずつ積み上げ、切り返しをして発酵させた。土糞の土と糞の比率は二対一だった。昔はどの家も役畜を飼っていて、糞尿処理に要した土が特に多かった。

一九五〇年代後半～一九七〇年代

祝南の飼養室は祝南正街にあった(図九・祝南)。

祝南の飼養室では、牛を中心とした役畜三〇～四〇頭を飼っていた。飼養室は専任者二人が管理した。飼養室に要した土は毎日二～三m³だった。飼養室に要した土は、皆で冬に一ヶ月をかけて一年分をまとめて採った。男性が土を掘り、女性がそれを架子車で運んだ。また、飼養室の土糞は年間で八〇〇m³だった。春節後に十数日をかけ、飼養室の土糞を皆で自隊の農地まで運んだ。飼養室の土や土糞は飼養室の傍に積み上げた。

B家は豚を一～二頭飼っていた。自家の豚小屋と便所に要した土は、年間で六～七m³だった。また、自家の土糞は年間で一〇m³だった。自家の土や土糞は通常、自宅

裏門前の「糞土街」(各家が堆肥場を設けた街路)に積み上げた。表門前でもよかった。

自家の糞尿処理に要した土は少なく、随時自分で採った。すなわち、自家の土堆を使い終えるたびに架子車三〜四台分を採った。自家の土糞は春節後に一〜二日をかけ、自家の自留地まで自分で運んだ。土や土糞は架子車で運んだ。

一九八〇年代〜二〇〇〇年代

B家は家畜を飼っていなかった。二〇〇三年以前、自家の便所に要した土は年間で三³m³だった。それに要した土は、自宅の土堆を使い終えるたびに随時自分で採った。自家の土糞は年間で四〜五⁵m³だった。二〇〇三年に家を建て替えた時、便所を水茅にした。それからは土を全く用いなくなり、人糞尿も友人に売るようになった。

④その他

瓦窯

一九六〇年代、徐家の東に祝南の瓦窯があった(図一〇・三)。一九七〇年代、澇池溝西崖に祝南の瓦窯があった(図一〇・二)。瓦窯で用いた土は瓦窯付近の崖で採った。

平整土地

平整土地は主に一九七〇年代に行った。毎日三〇〇人余が手作業で農地を均した。祝南の土地では南陵の西側を均した(図五・祝南四)。

(三) C家の状況

C略歴(聴取六回)

祝西在住。一九五三年生まれ。男性。一九六一年、祝家莊小学に進学。出稼ぎなど非農業経験は特にない。農閑期に祝家莊で家屋建築に従事。村民小組(生産隊)の役職に就いたことはない。

一九八〇年、陝西省安康市出身の妻と結婚。一男一女をもうける。長男は二〇〇八年に結婚。

調査時、母、妻、長男夫妻、孫と六人で暮らす。耕作請負地二ヶ所四畝を有し、小麦・トウモロコシを主に栽培。豚八頭を飼育。

①採土場

土壕の崖で、崖下と同じ高さの平地になるまで採土した。土壕内はもともと平らでなかったが、採土によって少しずつ平地になった。養分を含む表土がなくなったが、磷酸肥料を施用して二〜三年後には採土前と変わらなくなった。

一九五〇年代後半～一九七〇年代

農業集団化以降、祝西は農地の方形化のために隣隊と土地を交換した。その際、王家から深胡洞内の土地を受け取った(図五・祝西一)。祝西の自留地は五・六年ごとに調整した。自留地内で各家の分を調整する時もあれば、自留地全体を移す時もあった。その後、祝西の農地は鎮区建設などで減った。特に二〇〇八年のセメント工場の建設では、農地九八畝が一畝一二〇〇〇元の補償で収用された。調査時、祝西の農地は深胡洞、講草、大土場などだった(図五・祝西一・三)。

祝西の集団採土場は大土場にあった(図六・祝西)。生産隊長が採土する場所を決めた。一九六〇年代までは大土場の最深部の北崖で採土した。そこが平地になったので、一九七〇年代は大土場・深胡洞間の高所の南崖で採土した。大土場の他の場所は、崖が高くて採土できなかった。また、道端の崖では自由に採土できなかった。他隊の土地で採土したこともない。

C家は祝西の集団採土場で自家の建材製作や糞尿処理に要した土を自分で採った(図六・祝西)。梁勤武の湧池の傍で採土したこともある(図六・祝西一)。自家の自留地で採土したことはない。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

一九八二年冬、祝西は人口に応じて農地を分配した。農地は抽選によって分配した。その後、耕作請負地の小調整を三年毎に行った。二〇〇二年には耕作請負地の三〇年不変が決まった。祝西の集団採土場は一九八〇年代から深胡洞の西崖に移った(図七・祝西)。その集団採土場は調査時も存続していた。耕作請負地の調整の際、集団採土場の範囲も調整した。祝西では皆が自隊の集団採土場で採土した。道端の崖は、他家の耕作請負地であるため、自由に採土できなかった。

C家は農地分配の時、耕作請負地六ヶ所五畝強を受け取った。一九八三年七月に弟と分家した時、それらを両家で分けた。C家の耕作請負地は、耕作請負地の調整を経ても、基本的に変わらなかった。他家と耕作請負地の貸し借りをしたこともない。調査時のC家の耕作請負地は、大土場、講草の二ヶ所四畝だった(図五・祝西二、三)。

C家は祝西の集団採土場で自家の建材製作や糞尿処理に要した土を採った(図七・祝西)。一九九三年と二〇〇五年に家建てた時は、当地の切土(図七・祝西一)や旧宅の土牆を用いた。自家の耕作請負地は平地なので

採土したことがない。

調査時、土の売買が始まった。その背景には、耕作請負地の長期固定が決まり、皆が土地を大切にするようになったことがある。また、大量の土が必要なくなり、多くの村民小組が集団採土場を廃止したこともある。耕作請負地に崖がない家、大量の土が必要な家は土を買うようになった。売り手は上宮にいた(図三)。連絡すれば、彼らはいつでもトラクターで土を運んで来た。トラクター一台分の土が一八元だった。C家は毎年トラクター一台分の土を買っていた。C家は祝西の集団採土場でも採土できた。しかし、手間と時間を考慮し、自分で採土しなくなった。

②建材製作

一九五〇年代後半～一九七〇年代

C家は郷政府の傍の坯房に住んでいた(図八・c一)。その家屋や土牆を修繕したことはない。

Cを含めて誰もが土坯を作ることができた。土坯は土を木製の型枠と錘子で押し固めて作り、それから乾燥させた。土坯作りは平地で行った。普通は祝西の集団採土場で土坯を作り、乾燥させてから自宅に持ち帰った。自宅の門前で作ることもあった。自家で用いる土坯は各家

が自由に作れた。一日の任務が終わってから、そのための土を採りに行った。二～三月に土坯を作る家もあれば、七～八月に作る家もあった。

土炕は普通、三～四年で換えた。七～八年の時もあった。暖かくなった春、自分で自家の土炕を換えた。それに要した土は架子車一三～一五台分だった。また、土竈が壊れた時、その交換には土坯一〇〇個強を要した。土炕・土竈の廃土は土糞の山に加えた。

土牆は一層ずつ土を突き固めて築いた。生産隊で各家の土牆を築き直し、土牆の廃土を肥料にした。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

祝家莊の宅地は、一九七〇年代までほとんど変化がなかったが、一九八〇年代から急速に拡大した。その背景には、家族が多くなつて分家する家が増えたこと、家を建てるための手続きが簡単になったことがある。家を建てる場所は村民小組長が決めた。また、一九八五年、祝西は交通を便利にするため、通りの方向を変え、各家の門の向きを東西から南北にした。

一九八三年、C家は現住所に坯房を建てて移った(図八・c三)。家屋は合わせて三間建てた。一間あたり架子車一〇〇台強の土を要した。土牆の建築に要した土は、

一区画あたり架子車六〇台分だった。十数人に手伝ってもらいながら家屋・土塙を建てた。一九八〇年代は関係のよい人同士が協力して家屋や土塙を建てた。今年は誰の家を建てるのかを皆で相談して決めた。当時は手伝う人に謝礼を渡さなかった。調査時に家を建てると思ったら、関係の良し悪しに関わらず、全員に一日四〇～五〇元を渡さなければならなかった。なお、土炕は家を建ててから換えたことがない。

一九九三年、磚房に建て替えた。煉瓦は戢武の郷営煉瓦工場で生産したものを用了(図三)。

二〇〇五年、磚房を増築した。建築費用は二万円強だった。そのうち、セメントと石灰は一〇〇〇kgあたり三二〇元だった。煉瓦は岐陽の煉磚工場で作られたもの(図三)、一〇〇〇個あたり二二〇元だった。

③糞尿処理

土糞を造ったのは、土を用いて衛生管理や糞尿処理を行ったからである。土糞は土と糞を一層ずつ交互に積み重ね、それを切り返して発酵させた。土糞の土と糞の比率は二対一だった。土糞の山には他の廃物も加えた。土糞は自宅の門前に積み上げた。土糞の山には野菜を植えた。

一九五〇年代後半～一九七〇年代

一九七〇年代、日本産の尿素を用いた。尿素一袋(四〇kg)が七～八元だった。しかし、量が不足していて、なかなか買えなかった。

各生産隊は自隊の飼養室で役畜を飼っていた。個人の建物を借りて飼養室にする隊もあれば、新たに飼養室を建てる隊もあった。一九五〇年代後半、祝西は個人の建物を借りて飼養室にしていた。一九六〇年代、生産隊で梁勤武の湧池の西隣に飼養室を新たに建てた(図九・祝西s一)。さらに一九七〇年代、飼養室を大土場の集団採土場の隣に移した(図九・祝西s二)。そこは麟眉公路の傍なので、土糞の運搬にも便利だった。

祝西の飼養室では牛を中心とした役畜二〇～三〇頭を飼っていた。飼養室に要した土は、毎日架子車七～八台分だった。役畜一頭あたりの土糞は、年間で架子車一〇〇台分だった。飼養室の土や土糞は、飼養室の入口にある糞場に積んだ。一九五〇年代後半～一九六〇年代、飼養室に要した土は冬の農閑期、皆で一年分をまとめて採った。冬は地面に作物がないので、土の運搬に都合がよかった。採土は一日ずつ交替しながら、毎日十数人で行った。七～八往復↓朝食↓七～八往復↓昼食↓七～八

往復というように一日二十数往復した。採土に一カ月を要した年もあった。一九七〇年代は、飼養室が集団採土場の傍に移ったので、飼養室の専任者三人が随時採土した。飼養室の土糞は、冬の旧暦一〇月の小麦が約5cmに生長した頃、皆で自隊の農地まで運んだ。毎日三〇往復して一ヶ月強かかった。土糞の施用量は一畝あたり架子車六〇台分だった。土や土糞の運搬には架子車を用いた。祝西の各家は豚を数頭ずつ飼っていた。C家も豚を一〇三頭飼っていた。C家が豚を一頭飼っていた時、自家の豚小屋と便所に要した土は、年間で架子車一〇〇台分だった。自家の土糞は架子車二〇〇台分だった。自家の土や土糞は、自宅の便所の傍に積んだ。

自家の糞尿処理に要した土は、自宅の土堆を使い終えるたびに自分で採った。毎回架子車三〇四台分の土を採った。採土には架子車と鍬を用いた。自家の土糞は毎年一人あたり架子車一〇台分を生産隊に供出した。残りの土糞は冬の旧暦一〇月、一日の任務を終えてから、少しずつ自家の自留地まで自分で運んだ。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

一九八〇年代、化学肥料は国内で生産するようになり、徐々に多くなった。調査時、C家はコムギ一畝あたり炭

酸アンモニウム二袋・磷酸肥料一袋、トウモロコシ一畝あたり炭酸アンモニウム三袋を用いていた。炭酸アンモニウム・磷酸肥料は一袋50kgだった。炭酸アンモニウムは岐山産で一袋30元だった。

一九八〇年代、C家はブタを四〇五頭飼っていた。自家の豚小屋や便所に要した土は、年間で架子車二〇〇台分だった。自宅の土堆を使い終えるたび、架子車二〇四台分の土を自分で採った。自家の土糞は、コムギの丈が短い冬に一ヶ月強をかけ、自家の耕作請負地まで自分で運んだ。土や土糞の運搬には架子車を用いた。自家の土や土糞は自宅の門前に積んだ。

一九九五年頃、小強水廠が開業して水道水を供給した(図一〇・二)。C家は便所を水茅に換え、煉瓦とセメントで豚小屋を建て替えた。それからはブタを八頭飼い、豚小屋内を水で掃除するようになった。衛生管理のため、豚小屋から運び出した豚糞尿には土をかぶせた。それに要した土は、年間でトラクター一台分だった。自家の土糞は、年間で架子車三〇四〇台分だった。自家の土糞は冬、トラクターを借り切って自家の耕作請負地まで運んだ。トラクターの代金は元来、一往復5元だった。調査時は15元にまで上がった。

④その他

瓦窯

一九六八年、祝南が湧池溝西崖に瓦窯を設けた（図一〇・四）。その瓦窯では専任者が手作業で煉瓦を作った。一九八〇年代、機械生産の煉瓦が出回り、祝南はその瓦窯を閉鎖した。

平整土地

平整土地は農業社時期を通して行った。なかでも一九七〇年代は大規模に行った。祝西の土地では、大土場とその西側一帯を均した（図五・祝西三）。その際、大土場の西隣の窪地の崖を切土した。この切土は盛土に用い、建材製作や糞尿処理に用いなかった。

湧池

下荘、小学の門口、鎮政府の裏庭、梁勤武批発大樓に湧池があった（図一〇・八一）。鎮政府の湧池は最も大きく、面積一畝強だった。鎮政府の湧池は一九五八年に建設した。そこはもともと利用していなかった土地であり、雨水が流入しやすい低地でもあった。湧池を建設したのは、機井や水道水が当時なかったからである。その他の湧池はみな面積八〇㎡、水深六〇cmだった。

C家は、自宅から最も近い梁勤武の湧池で家畜に水を

与えた。梁勤武の湧池はとても小さかった。そのため、鎮政府の湧池で洗濯した。湧池の底土を浚ったことはない。湧池の水は少なく、灌漑に用いたこともない。

一九七〇年代、小水廠を中国通信に建設した（図一〇・一）。C家を含む祝西・祝南の各家は、そこで水を汲むようになり、湧池を利用しなくなった。その結果、湧池は廃棄物と土で徐々に埋もれた。一九七五年頃、梁勤武、鎮政府の湧池を埋め立てた。

地下水

一九七〇年代以降、各生産隊は灌漑用井戸を一基有していた。しかし、灌漑用水の汲み上げによって地下水位が下降して使えなくなった。調査時、C宅の地下水位は深さ三五〜三六mだった。

（四）D家の状況

D略歴（聴取七回）

高家在住。一九四八年生まれ。男性。一九五六年、祝家荘小学に進学。一九六八〜一九七三年、地元の軍隊に在籍。一九七〇年代〜一九九〇年代、高家の生産隊長・村民小組長を歴任。出稼ぎなど非農業経験は特にない。祝家荘で家屋建築に従事。

一九七三年、岐山県蒲村鎮出身の妻と結婚(図三)。一男一女をもうける。長女は嫁ぐ。長男は二〇〇一年に結婚し、夫婦ともに西安市で出稼ぎ。

調査時、妻、孫二人の四人で暮らす。耕作請負地四ヶ所五・五畝を有し、小麦・トウモロコシ・豆類・リンゴを栽培。豚三頭を飼育。

①採土場

採土は耕作に向かない土地、すなわち平らでない土地で行った。基本的には土壕の崖で採土した。

土壕内はもともと平らでなかったが、採土によって徐々に平地になった。養分を含む表土がなくなったが、緑肥を施用すれば作物を植えられるようになった。

一九五〇年代後半～一九七〇年代

農業集団化以降、高家は農地の方形化のため、徐家(図三)、王家など隣隊と土地を交換した。高家の自留地は莊東の西部にあった(図五・高家三)。その位置はずっと固定されていた。調査時、高家の農地は長征、水渠、莊東(東辺)、小頭溝、西辺井、小頭溝的南地、北溝溝、莊北、東壕(南溝)、南壕、石溝、東辺溝など三八〇畝だった(図五・高家一・一一)。

高家の集団採土場は東壕の北崖にあった(図六・高

家)。一九七〇年代、高家は整地を兼ねて小頭溝と北溝で採土したことがある(図六・高家一、二)。また、下莊の土坑でも採土したことがある(図六・高家三)。他隊の集団採土場で採土したことはない。

D家は高家の集団採土場で自家の建材製作や糞尿処理に要した土を自分で採った(図六・高家)。下莊の土坑で採土したこともある(図六・高家三)。自家の自留地で採土したことはない。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

一九八二年冬、高家は人口と労働力に応じて農地を分配した。その際、農地の良し悪しを等級に分けた。三～五年毎に耕作請負地の小調整を行い、人口の増減に応じて各家の耕作請負地の面積を調整した。一九九五年頃、耕作請負地の大調整を行い、三〇年不変が決まった。高家の集団採土場は、農地分配後も東壕の北崖に残された(図七・高家一)。さらに、南壕にも集団採土場を設けた(図七・高家二)。南壕の崖上の一畝は高家の土地だった。それらの集団採土場は、調査時も存続していた。耕作請負地の調整の際、集団採土場の範囲を調整した。また、一九八〇年代～一九九〇年代、皆が下莊の北側で宅地造成を兼ねて採土した(図七・高家一)。

D家は農地分配の時、莊東、西辺井、長征、東辺溝二ヶ所の五ヶ所七畝強を受け取った(図五・高家一、三、五)。その後、D家の耕作請負地は長女の結婚などで減った。二〇〇〇年代には他家と一畝を交換した。調査時のD家の耕作請負地は、莊東、西辺井、長征、東辺溝の四ヶ所五・五畝だった(図五・高家一、三、五)。

D家は高家の集団採土場で自家の建材製作や糞尿処理に要した土を自分で採った(図七・高家)。二〇〇〇年代は南壕の集団採土場と道端の崖で採土した(図七・高家J二、二)。道端の崖の上は他家の耕作請負地だが、採土してかまわなかった。自家の耕作請負地で採土したことはない。

土の売買は調査時に始まった。D家は大量の土が必要ないので買ったことがない。

② 建材製作

一九五〇年代後半～一九七〇年代

高家の宅地は北の上荘と南の下荘に分かれていた。D家は下荘の東端の坯房に住んでいた(図八・d一)。その家屋や土牆を修繕したことはない。一九七〇年代、現住所に坯房を建てて移った(図八・d二)。それに要した土は大車数百台分にのぼった。そのうち、土牆が一区

画あたり架子車六〇台分、土竈が土坯一〇〇個強だった。人に手伝ってもらいながら家屋・土牆を建てた。

土炕は数年で換えた。その間隔は三～五年、五～六年、二〇～三〇年と一定しなかった。土炕の交換に要した土は、大車一～二台分だった。自家の土炕に用いた土坯は、自分で冬春に高家の集団採土場で作った。

生産隊で各家の土牆を築き直すこともあった。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

D家は一九八〇年代まで土炕を換えていた。

一九九〇年代、坯房を一間増築し、土牆を築き直した。そのうち、家屋に要した土は大車一〇～一五台分¹⁵⁾だった。

二〇〇〇年代、磚房に建て替えた。建築費用は六万円だった。煉瓦は付近の村落の煉瓦工場で作られたもので、一〇〇〇個あたり六〇元だった。当時は皆がお互いに助け合って家を建てた。調査時是一日五〇元の謝礼を手伝う人に渡した。ただし、関係のよい人には渡さなくてよかった。

③ 糞尿処理

昔は化学肥料がなく、他に方法がなかったので、土糞を造った。人畜糞尿に土をかぶせたのは、臭気を抑えるためである。土糞の土と糞の比率は考えたことがない。

一九五〇年代後半～一九七〇年代

一九七〇年代、日本産の尿素を用いた。しかし、その量は少なかった。

一九六〇年代、高家は上荘と下荘の傍にそれぞれ審洞を掘って飼養室にした(図九・高家s一、s二)。

高家の飼養室では、ウマ二頭、ウシ・ラバ二〇～三〇頭、ロバ一～二頭の役畜を飼っていた。飼養室は皆が交替で管理した。飼養室に要した土は、毎日常車一台分だった。飼養室の土糞は、年間で大車七〇〇～八〇〇台分だった。その土糞は冬春に一ヶ月をかけ、皆で自隊の農地まで運んだ。土糞の施用量は一畝あたり架子車五〇台強だった。土や土糞の運搬には一九六〇年代から架子車を用いた。飼養室の土や土糞は、飼養室の傍の糞場に積んだ。

D家は豚を一～三頭飼っていた。自家の豚小屋や便所で要した土は、年間で大車一〇台分だった。自家の土糞は年間で大車一〇～一五台分だった。自家の土は自宅の門前に積み、自家の土糞は宅地の周りがある自隊の小糞場に積んだ。

自家の糞尿処理に要した土は、冬に三～四日をかけ、一年分をまとめて自分で採った。自家の土糞は、冬春に

五日をかけ、自家の自留地まで自分で運んだ。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

一九八〇年代から国内産の化学肥料を用いた。調査時、D家は年間で一畝あたり燐酸肥料五〇kg強、尿素一〇kg強、窒素肥料五〇kg強を用いていた。

一九八〇年代、D家は豚一～三頭と役畜の牛二頭前後を飼っていた。自家の豚小屋・牛舎、便所に要した土は、年間で大車三～五台分だった。自家の糞尿処理に要した土は、主に冬、約一〇日をかけて一年分をまとめて自分で採った。自家の土糞は年間で大車三～五台分だった。自家の土糞は宅地外の村民小組の土地に積んだ。そして、冬に地面が凍ってから一ヶ月をかけて、自家の耕作請負地まで自分で運んだ。土や土糞の運搬には、架子車やトラクターを用いた。

一九九〇年代、D家は農業機械化で牛を飼わなくなり、豚一～三頭だけを飼っていた。一九九〇年代後半からは水道水の供給が始まり、D家は便所を水茅に換えた。

二〇〇一年、D家は煉瓦とセメントで豚小屋を建てた。それからは豚を三頭飼い、豚小屋内を水で清掃するようになった。豚小屋から運び出した豚糞尿には土をかぶせた。自家の糞尿処理に要した土は非常に少なく、自宅の

土堆を使い終えるごとに随時自分で採った。自家の土糞は冬に三〇五日をかけて自家の耕作請負地まで自分で運んだ。土や土糞の運搬にはトラクターを用いた。

④その他

瓦窯

解放前から農業社時期、東壕に高家の瓦窯があった(図一〇・五)。その瓦窯では専任者が手作業で瓦や煉瓦を作った。一九七〇年代、D家はそこで作られた瓦を用いて家を建てた。一九八〇年代、大多数の家が機械生産の煉瓦を用いるようになり、その瓦窯は閉鎖した。

平整土地

平整土地は一九六〇年代～一九八〇年代、特に一九七〇年代を中心に行った。一九七〇年代、郷政府が平整土地の年間目標値を各隊に割り当てた。目標値は年間一〇～二〇畝で、年によってまちまちだった。冬春の農閑期、皆で切土・盛土を行った。高家の土地では、莊東、小頭溝、北溝溝、莊北など大部分を均した(図五・高家三、四、七、八)。切土は建材製作や糞尿処理に用いなかった。

土坑の埋め立て

下荘には採土による土坑があった(図一〇・六)。一

九七〇年代、その土坑は周囲の土を用いて埋め立てた。

湧池

祝家荘には湧池が四面あった。そのうちの二面は下荘と小学にあった(図一〇・八、九)。どちらも面積〇・三畝強、深さ三～四mであり、葦が生えていた。祝家荘の湧池は、はるか昔に各家が資金を出し合って建設したものである。

農業社時期、湧池は誰でも利用できた。D家は下荘、小学の湧池で家畜に水を与え、洗濯し、水遊びをした。また、四～五年に一回、水が枯れる季節に湧池の底土を採り、肥料に用いた。

一九八〇年代、湧池の水質が汚くなり、D家は湧池を利用しなくなった。下荘の湧池は一九七〇年代、その周囲の土を用いて埋め立てた。小学の湧池は一九九〇年代、湧池溝の西崖の土を用いて埋め立てた。

洪水と土壕

湧池溝などの土壕はもともと洪水によって形成された(図五・祝南二)。はるか昔、洪水が毎年発生して細長く深い谷を流れた。谷は浸食されてますます深くなった。それから人々が深い谷で採土し、土糞を造り、家を建てた。そうして大きな土壕が形成された。

地下水

一九六〇年代～一九八〇年代、高家は灌漑用井戸を六回掘った。調査時は灌漑水を一畝あたり六〇t用いた。それには七元かかった。調査時のD宅の地下水位は深さ二四～三〇mだった。

(五) E家の状況

E略歴(聴取六回)

王家在住。一九三五年生まれ。男性。一九四一年、祝家荘小学に進学。一九五二～一九五四年、蔡家坡職業中学(岐山県蔡家坡鎮)に在籍。一九五六年から岐山県城や宝鶏市鳳翔県城で販売業に従事。一九六二年帰郷。一九六三～一九六九年、王家の村民兵営専を務める。出稼など非農業経験は特にない。

一九五四年、祝家荘鎮駙馬莊村出身の妻と結婚(図三)。二男三女をもうける。長男は岐山県周都建材廠(祝家荘鎮駙馬莊村)に勤務(図三)。二男は祝家荘で飲食店を経営。娘達はみな他村に嫁ぐ。

調査時、妻と二人で暮らす。耕作請負地一ヶ所〇・八畝を有し、小麦・トウモロコシを栽培。豚一四～一五頭と山羊二頭を飼育。

① 採土場

基本的に土壕の崖で心土を採った。平地は農地なので採土できなかった。採土する場所には作物を植えなかった。

崖上の土地は灌漑水を上げられず、あまり肥えてもいない。土壕内は灌漑できるので水分条件がよい。採土によつて養分を含む表土がなくなったが、施肥をすればよかった。

一九四〇年代～一九五〇年代前半

祝家荘では全家が私有採土場を有していた。誰でも自由に採土してよい土地や共有の採土場はなかった。私有採土場の貸し借りや土の売買もなかった。他家の所有地や道端の崖では採土できなかった。

E家は水灘、巨家地、瑞北路、門前、北面二ヶ所、邢路、碑子前、深胡洞の九ヶ所二九畝を有していた(図五・E家一・九)。土地改革では二畝を受け取った。E家の採土場は深胡洞にあった(図五・E家九)。その南崖で自家の建材製作や糞尿処理に要した土を自分で採った。

一九五〇年代後半～一九七〇年代

農業集団化以降、王家は農地の方形化のために隣隊と

土地を交換した。その際、祝西に深胡洞内の土地を譲った(図五・祝西一)。王家の自留地の位置は固定されていなかった。調査時の王家の農地は榆樹壩、徐家門前、渠北、渠子、瓜地、上莊莊北、北寺溝、中寺溝、北面、西頭窖、小学背、石溝など二〇〇畝強だった(図五・王家一・一一)。

一九五〇年代後半、王家の集団採土場は深胡洞の南崖にあった(図六・王家j一)。その集団採土場は一九六〇年代に中寺溝(図六・王家j三)に移り、一九七〇年代に北寺溝(図六・王家j四)に移った。王家の飼養室を北寺溝に移した時(図九・王家s二)、土を運びやすくするために集団採土場もその傍に移したのである。王家では集団採土場以外の自隊の土地や他隊の集団採土場で採土したことはない。

E家は王家の集団採土場で自家の建材製作や糞尿処理に要した土を自分で採った(図六・王家j一、j三、j四)。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

一九八一～一九八二年、王家は人口と労働力にに応じて農地を分配した。一九八九年には耕作請負地の大調整を行った。王家の集団採土場は農地分配の際に廃止した。

そのため、各家は北寺溝、小学背、西頭窖にある自家の耕作請負地を自家の採土場とした(図七・王家一・三)。E家は農地分配の際、耕作請負地七ヶ所四・八畝を受け取った。耕作請負地の調整を経ても、E家の耕作請負地は変わらなかった。他家と耕作請負地を交換したことはない。二男が分家した時、二男家族に四畝を譲った。調査時のE家の耕作請負地は渠北の一ヶ所〇・八畝だった(図五・王家四)。

E家の採土場は、西頭窖にあった(図七・王家三)。そこにはE家の窖洞址があった。その崖上も自家の耕作請負地だった。E家はその採土場で自家の建材製作や糞尿処理に要した土を自分で採った。

E家は土を買ったことがない。

② 建材製作

一九四〇年代～一九五〇年代前半

王家の全家が西頭窖の窖洞に住んでいた(図五・王家一〇)。E家も西頭窖に住んでいた(図八・e一)。E家の窖洞はEの祖父が建てたものである。E自身は窖洞も土牆も修繕したことがない。

土炕は通常、七ヶ八年で換えた。土炕を換える季節は六ヶ七月だった。それに要した土坯は、大車一・五台分

だった。⁽¹⁶⁾その土坯は自家の採土場で作る時もあれば、自宅で作る時もあった。土炕の廃材は肥料にした。

一九五〇年代後半～一九八〇年代

土墻は雨で損なわれるので、数十年で築き直した。土墻の廃材は肥料にした。そのため、生産隊で各家の土墻を築き直した。どの家の土墻を築き直すかは生産隊長が決めた。一九五八年、生産隊でE家の土墻を築き直した。それに要した土は、一区画あたり架子車二〇台強だった。

E家は土炕を七～八年で換えた。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

一九八〇年代、王家の全家が崖上に移った。窑洞は雨水が流れ込んで不便であり、崩れる危険もあったからである。

一九八八年、E家は現住所に磚坯房を一間建てて移った(図八・e二)。それに要した土は、大車一〇台分だった。家屋の一部や炕には煉瓦を用いた。それからは炕を換える必要がなくなった。煉瓦は小強の煉瓦工場で作られたもので(図三)、一〇〇〇個あたり八九元だった。建築費用は合わせて四〇〇～五〇〇元だった四～五人に手伝ってもらいながら家屋を建てた。当時は皆で助け合い、順番に各々の家屋を建てた。

③糞尿処理

昔は化学肥料がなく、人畜糞尿しかなかったので、土糞を造った。人畜糞尿に土をかぶせたのは、環境や衛生のためである。通常、土糞の土と糞の比率は三対一だった。人畜糞尿の発酵を進めるための作業は特になかった。ただ糞と土を一層ずつ積み重ねるだけだった。

一九四〇年代～一九五〇年代後半

E家は牛・驢馬を一頭ずつ飼っていた。自家の牛・驢馬の畜舎と便所に要した土は、年間で大車一〇～二〇台だった。自家の土糞は年間で大車一七台分だった。自家の土や土糞は自宅の門前に積んだ。

自家の糞尿処理に要した土は、地面が凍って運びやすい冬に一年分をまとめて自分で採った。採土は大車で毎日二往復して四～五日かかった。自家の土糞は、冬の一日～一月に四～五日かけて、自家の農地まで自分で運んだ。土糞の施用量は一畝あたり大車三台分だった。

一九五〇年代後半～一九七〇年代

一九五〇年代後半、王家と高家は飼養室をそれぞれ有していた。王家は当初、西頭窑西部に窑洞を掘って飼養室にした(図九・王家s一)。窑洞には雨水が流れ込んだため、一九六三年に王家の飼養室を北寺溝の東側に移

した(図九・王家s二)。

王家の飼養室では馬二〇三頭、驢馬七〇八頭、牛一〇頭、騾馬四〇五頭を飼っていた。飼養室は飼養員が管理した。飼養室に要した土は毎日大車二〇三台分だった。

そうした土は主に冬、二〇〇三〇日かけて一年分をまとめて皆で採った。他の季節に採ることもあった。飼養室の土糞は、年間で大車二〇〇台分だった。飼養室の土糞は冬の旧暦一〇二月に皆で自隊の農地まで運んだ。これには一ヶ月強、最長で二ヶ月かかった。土糞の施用量は一畝あたり架子車一〇台強だった。飼養室の土や土糞は飼養室の傍に積んだ。土や土糞の運搬には一九六〇年代から架子車を用いた。

E家は豚二〇三頭を飼っていた。自家の豚小屋や便所に要した土は、年間で架子車二〇〇三〇台分だった。自家の土糞は年間で架子車二〇〇三〇台分だった。自家の土や土糞は自宅の門前に積み上げた。

自家の糞尿処理に用いた土は、冬に二〇三日をかけ、一年分をまとめて自分で採った。自家の土糞は、冬の旧暦一〇二月に三〇四日をかけ、自家の自留地まで自分で運んだ。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

農地分配の頃、化学肥料は量が少なく、配給制だった。調査時、E家は〇・八畝の農地に年間で炭酸アンモニウム三袋を用いていた。炭酸アンモニウムは一袋五〇kgだった。

E家は一九八〇年代に豚二〇三頭と役畜の牛一頭を飼っていた。自家の豚小屋・牛舎や便所に要した土は、年間で架子車三〇〇四〇台分だった。自家の土糞は年間で架子車三〇〇四〇台分だった。一九九〇年代前半は豚二〇三頭のみを飼っていた。当時、自家の豚小屋や便所に要した土は、年間で架子車二〇〇三〇台分だった。自家の土糞は架子車二〇〇三〇台分だった。一九八〇年代～一九九〇年代前半、自家の糞尿処理に要した土は、自宅の土堆を使い終えるたび、架子車一〇二台分を随時自分で採った。自家の土糞は冬に四〇五日をかけ、自家の耕作請負地まで自分で運んだ。土や土糞の運搬には架子車を用いた。自家の土や土糞は、自宅の表門か裏門に積んだ。

一九九四年、E家は煉瓦とセメントで豚小屋を建て替えた。翌年から豚を六〇七頭飼い、豚小屋内を水で掃除するようになった。豚小屋から運び出した豚糞尿には土をかせた。二〇〇〇年代は山羊二頭も飼うようになった。

た。二〇〇七年から祝家荘で水茅が増えてきたが、E家は調査時も旱茅を用いていた。自家の糞尿処理に要した土は、四〇五年でトラクター二台分だった。その土は範家宮の友人がトラクターで運んだ(図三)。一往復一三元だった。自家の土糞は冬に自家の耕作請負地まで自分で運んだ。自家の土や土糞は自宅の門前に積んだ。

④その他

瓦窯

解放前、徐家の傍に祝南の瓦窯があった(図一〇・三)。その瓦窯では一戸が手作業で煉瓦や瓦を作っていた。

平整土地

一九六三～一九六四年、王家の土地の中で渠北や上荘莊北を均した(図五・王家三、六)。その際、切土は盛土に用い、建材製作や糞尿処理に用いなかった。一九八〇年代以降、各家が西頭窯や北寺溝の自家の耕作請負地を採土しながら徐々に均した(図五・王家七、八、一〇)。

湧池

下荘、小学、鎮政府、梁勤武に湧地があった(図一〇・八・一一)。いずれも面積一畝前後、深さ二m前後

だった。鎮政府の湧池は解放後に建設した。他の湧池は早くから存在したので、自然に形成したのか人工的に形成したのか分からない。

解放前も農業社時期も湧地は共有のものであり、誰でも利用できた。E家は雨の多い夏、鎮政府と小学の湧地で洗濯し、家畜に水を与えた。湧地の底土を浚ったことはない。

鎮政府、梁勤武の湧地は埋め立ててから三〇～四〇年経った。小学、下荘の湧池も埋め立てから二〇年強が過ぎた。

寺溝

一九四〇年代、寺溝は廟地だった(図五・祝南三、王家七、八)。小学背に実寿寺があり(図一〇・一二)、その廟会が土地を四〇五畝有していた。

地下水

一九六〇年代～一九八〇年代、王家は灌漑用井戸を三回掘った。一九八〇年代以降は機井が増えた。

(六) F家の状況

F略歴(聴取五回)

王家在住。一九四〇年生まれ。男性。一九五〇年代に

祝家莊小学に在籍。一九五九年、益店初級中学（岐山県益店镇）に進学。一九六四年以降は西安航空工業学校（陝西省西安市）に進学し、陝西省西安市の航空関連の工場に勤務。一九九五年退職。

一九六六年、祝家莊鎮範家営村出身の妻と結婚（図三）。息子二人をもうける。長男は王家で養豚場を経営。二男は西安市で航空関連に従事。

調査時は妻と二人で暮らす。耕作請負地八ヶ所・八畝を有し、小麦・トウモロコシ・豆類・リンゴを栽培。家畜を飼育せず。

①採土場

土壕の崖で崖下と同じ高さの平地になるまで採土した。崖は作物がないうえ、少ない面積で大量に採土できた。平地は作物があるうえ、養分を含む表土を広い面積で採ってしまう。

崖上は高所であったり、平らでなかったりして、水分条件がよくなかった。採土後は水分条件がよくなった。ただし、採土によって養分を含む表土がなくなつたので、一年目の作物の出来はよくなかった。施肥をして二年目からはよくなった。

一九四〇年代～一九五〇年代前半

祝家莊では全家が私有採土場を有していた。崖のある土地を採土場にした。崖上が他家の所有地なら採土できなかった。誰でも自由に採土してよい土地や共有採土場はなかった。土の売買もなかった。私有採土場の賃貸は基本的になかった。関係が良ければ他家の採土場で採土してもよかった。当時は自由に土地を売買できたので、私有採土場がなければ土地を買って私有採土場にすればよかった。

F家は深胡洞、石溝六ヶ所の七ヶ所三〇畝強を有していた（図五・F家一・七）。土地改革を経ても、F家の所有地は変わらなかった。F家の採土場は深胡洞だった（図五・F家二）。その北崖で自家の建材製作や糞尿処理に要した土を自分で採った。深胡洞には作物が植えられていた。

一九五〇年代後半～一九七〇年代

農業集団化以降、王家は隣隊と交錯した土地を交換し、農地区画を整理した。王家の自留地は、調査時の王家の宅地にあった。調査時、王家の農地は榆樹塬、徐家門前、渠北、渠子、瓜地、莊北、北寺溝、北面、西頭窑（王家窑園・老園）、小学背など二八〇畝強だった（図五・王家一・一一）。

王家の集団採土場は当初、深胡同の北崖や西頭窑西部にあった(図六・王家j一、j二)。一九六三年、その集団採土場を北寺溝北部に移した(図六・王家j四)。集団採土場が飼養室の傍にあれば土を運びやすいので、王家の飼養室を移した時に王家の集団採土場も移したのである。土炕を換える時など少量の土を採る場合は便利な場所で採ったこともある。それは平地でもかまわなかった。

F家は王家の集団採土場で自家の建材製作や糞尿処理に要した土を自分で採った(図六・王家j一、j二、j四)。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

一九八四年、王家は人口に応じて農地を分配した。農地は抽選によって分配した。一九九一年、耕作請負地の大調整を行い、各家の耕作請負地を固定した。王家の集団採土場は農地分配の際に廃止した。そのため、各家は自家の耕作請負地で採土した。各家の採土場は、小学背・西頭窑の北崖の窑洞址、北寺溝にあった(図七・王家一・三)。土炕を換える時など少量の土を採る場合は、それら以外の自家の耕作請負地で採土する家もあった。

F家は農地分配の際、北寺溝など三畝を受け取った

(図五・王家七)。他家と耕作請負地を交換したことはない。調査時のF家の耕作請負地は、渠北、渠子、榆樹塬など八ヶ所二・八畝だった(図五・王家一、三、四)。それらの耕作請負地の位置は、農地分配の時と異なる。

F家の採土場は北寺溝内にある自家の耕作請負地にあった(図七・王家一)。そこで自家の建材製作や糞尿処理に要した土を自分で採った。一九八三年に家を建てた時は、当地の切土を主に用いた(図七・王家四)。

一九九五年以降、土の売買が始まった。売り手は西莊・上營・戡武にいた(図三)。彼らはトラクターで土を運んで来た。F家は大量の土が必要なので買ったことがない。

② 建材製作

一九四〇年代～一九五〇年代前半

王家の全家が西頭窑の窑洞に住んでいた(図五・王家一〇)。F家も西頭窑の窑洞に住んでいた(図八・f一)。その窑洞や土牆を修繕したことはない。

F家は土炕を三・四年に一度、春夏に換えた。土竈も数年で換えた。その年数は三年、五年、七・八年と一定しなかった。交換に要した土坯は、土炕が二〇〇個、土竈が八〇～九〇個である。それらに用いた土坯は自分で

作った。老人しかいない家は、関係のよい人に頼んで作ってもらった。土坯は自家の採土場で、錘子と木製の型枠で土を突き固めて作った。そして、乾燥させてから自宅に持ち帰った。土炕・土竈の廃材は肥料にした。それらは土糞の山に加えず、直接自家の農地まで運んだ。

一九五〇年代後半～一九七〇年代

F家は土炕と土竈を三～四年で換えた。自家の土炕・土竈に要した土坯は自分で自由に作れた。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

窑洞は安全でないので、王家の全家が一九八三年までに崖上に移った。

一九八三年、F家も崖上に坯房を一間建てて移った(図八・f・二)。自分で土坯を二五〇〇個作り、業者が家を建てた。土墻は自分で築いた。土墻一区画あたり三～四㎡の土を要した。一九九二年、坯房を一間増築した。それに要した土坯も二五〇〇個だった。また、土炕や土竈は三～四年で換えた。

二〇〇二年、F家は現住所に磚房を建てて移った(図八・f・三)。旧宅は長男家族に譲った。整地は自分で行った。その盛土に一〇㎡の土を要した。それから業者が家や墻を建てた。建築費用は三万円だった。煉瓦は蒲

村鎮令家の煉瓦工場で作られたもので(図三)、一〇〇〇個あたり七三元だった。

③糞尿処理

土で人畜糞尿を処理したのは、畜舎や便所を清潔に保つためである。人畜糞尿の発酵を進めるためでもある。また、土糞の施用で農地の土壌が柔らかくなった。土糞の土と糞の比率は三対一だった。

一九四〇年代～一九五〇年代後半

F家は牛・驢馬を一頭ずつ飼っていた。自家の牛・驢馬の畜舎や便所に要した土は年間で大車一五台分¹⁷⁾だった。自家の土糞は年間で七～八㎡だった。自家の土や土糞は自宅の門前に積んだ。

F家が自家の糞尿処理に要した土は、冬の農閑期に一年分をまとめて自分で採った。伯父が牛に大車を牽かせて土を運んだ。採土は早ければ四～五日、遅ければ六～七日かかった。自家の土糞は農閑期の旧暦一〇月に自家の農地まで自分で運んだ。土糞の施用量は、一畝あたり大車三～五台分だった。当時は肥料が少なかったので、施肥をする土地としない土地があり、毎年順番で施肥をした。よい土地に多めに施肥をして、石溝のような悪い土地は少なめにした。農地との距離によって施用量を変

えたことはない。

一九五〇年代後半～一九七〇年代

一九六〇年代中期から日本産の尿素を用いた。その量はとても少なかった。

王家は初級社の時に西頭窑西部に窑洞を掘って飼養室にした(図九・王家s一)。窑洞は危険で漏水もした。そこで一九六三年、飼養室を北寺溝の東側に移した(図九・王家s二)。そこは土地が広いうえ、土糞を農地まで運ぶのにも都合が良かった。

王家の飼養室では牛十数頭、騾馬四～五頭、驢馬三～四頭を飼っていた。飼養室は皆で順番に管理した。飼養室に要した土は毎日架子車二台分だった。飼養室の土や土糞は、その外にある糞場に積んだ。飼養室に要した土は農閑期、皆で一年分をまとめて採った。一九六〇年代以降、土や土糞の運搬には架子車を用いた。どの家も木製の架子車を一台持っていた。採土は大車一台なら一〇日かかり、架子車二〇台強なら五日かかった。飼養室の土糞は、旧歴一〇月の農閑期に皆で自隊の農地まで運んだ。大車一台なら毎日十数往復して半月かかり、架子車なら一ヶ月強かかった。土糞の施用量は一畝あたり大車五～一〇台分だった。

F家は一九六〇年代まで豚一～二頭を飼っていた。自家の豚小屋や便所に要した土は年間で五～六 m^3 だった。

自家の土糞は年間で五～六 m^3 だった。一九七〇年代、豚を飼わなくなった。自家の土・土糞はそれぞれ年間で四～五 m^3 に減った。自家の土や土糞は自宅の門前に積んだ。自家の糞尿処理に要した土は、自宅の土堆を使い終わるたび、架子車二台分前後を自分で採った。自家の土糞は生産隊に供出せず、旧暦一〇月の農閑期に一日をかけ、自家の自留地まで自分で運んだ。

一九八〇年代～二〇〇〇年代

一九八〇年代以降、F家は宝鶏産の炭酸アンモニウムと燐酸肥料を用いた。調査時はコムギ一畝あたり各一袋(五〇 kg)を用いていた。土糞を施用していた頃は土壌が柔らかかったが、化学肥料を施用してから柔らかくなかった。

F家は家畜を飼っていなかった。自家の便所に要した土は、二〇〇二年まで年間で架子車二〇～三〇台分だった。自宅の土堆を使い終わるたびに自分で採土した。また、自家の土糞は年間で架子車二〇～三〇台分だった。土糞の施用量はどの耕作請負地にも違いがなかった。また、土や土糞の運搬には架子車を用いた。自家の土や土

糞は自宅の門前に積み上げた。

二〇〇二年にF家が家を建てた時、便所を水茅にした。それから便所にも土を用いなくなった。一九九〇年代に小強水廠が開業すると、F家は水道水を用いるようになった(図一〇・二)。

④その他

瓦窯

解放前、徐家の東に徐家の瓦窯があった(図一〇・三)。農業社時期、南溝に高家の瓦窯があった(図一〇・五)。それらの瓦窯では手作業で煉瓦と瓦を作った。一九八〇年代、手工生産の煉瓦を用いなくなり、高家の瓦窯は閉鎖した。

平整土地

農業社時期、農地の方形化・水平化などの農田基本建設により、耕地の方向を改め、低所や高所を均した。特に一九七〇年代、郷政府が毎年どの村の土地を均すか計画し、それを生産大隊に割り当てた。それから各生産隊が別々に任務をこなした。王家の土地では渠北や莊北などを均した(図五・王家三、六)。一九八〇年代は各家が北寺溝、西頭窯、小学背にある自家の耕作請負地を採土しながら少しずつ均した(図五・王家七、八、一〇、

一一)。

土坑の埋め立て

下莊に土坑があった(図一〇・六)。その崖には高家の飼養室の窑洞があった。下莊の土坑は宅地拡大で埋め立てられた。

澇池

下莊、小学校、鎮政府、梁勤武に澇池があった(図一〇・八・一一)。いずれも面積一畝強、深さ一m、水深三〇〜四〇cmだった。

澇池は解放前も農業社時期も共有のものであり、誰でも利用できた。皆がそこで家畜に水を与え、洗濯した。F家は小学校の澇池を利用した。澇池の底土を浚ったことはない。

小学校の澇池は一九七〇年代に埋め立てた。

洪水と土壕

深胡同はもともと一筋の谷だったが(図五・祝西一)、その後の採土で拡大した。北寺溝、澇池溝も大量の雨水によって形成され(図五・祝南二、王家七、八)、人為的要因は少なかった。

寺溝

一九四〇年代、北寺溝と南寺溝は廟地だった(図五・

王家七、八、祝南三)。小学背の崖上には実寿寺があり(図一〇・一二)、その廟会が土地を数畝有していた。

地下水

一九五八年―一九八〇年代、灌漑用井戸を掘った。一九八〇年代以降は機井を用いた。灌漑の際、取水を始めてから数時間後に水が出なくなった。灌漑水の汲み上げによって地下水位が下降したうえ、泥土が井戸内に堆積した。そのため、これらの井戸はみな放棄した。調査時のF宅の地下水位は深さ三五m強だった。

である。灌漑で地下水を使い過ぎたため、一九八〇年代から地下水が下降した。

四 おわりに

本稿で述べた聴取調査の意義は以下の二点に集約できる。

第一に、中国北方乾燥地農業システムの実態を把握するための材料を提供できたことである。土糞・土雑肥の利用は関中平原だけにとどまらない。それらは具体的状況こそ異なるものの、中国北方乾燥地に普遍的に見られる。二〇一二年には内モンゴル・アオハンの雑穀栽培がFAOのGIAHS (Globally Important Agricultural

Heritage Systems)に選定され、中国北方乾燥地農業システムに注目が集まるようになった。もとより土に依拠して乾燥地に適応した中国北方乾燥地農業システムは、世界的にも極めて特殊である。中国北方乾燥地農業システムが長期にわたって営まれてきた過程、それが農業・農村の現代化によって変化していく過程を解明することは、歴史学のみならず、農学・環境学にとっても意義深い。しかしながら、肥料用土の獲得・利用に関する歴史資料は極めて少ない。現代化による肥料用土の獲得・利用の変化に正面から取り組んだ論考も見られない。それは肥料用土の獲得・利用が当地の人々にとって極めてありふれた慣習だからである。かといって、外国人が中国北方乾燥地で農村調査を行うにも制限が多い。筆者はいわば例外的ともいえるそのような機会を得て、極めて限られた範囲についてではあるが、その実態を把握できたのである。

第二に、農業システムにおける農業活動と農村景観の維持・変遷との具体的関係の解明に対し、一定の材料を提供できたことである。本稿は農業システムの担い手に注目し、彼らが土獲得・利用に関する作業やその場所を具体的に記載した。中国農業史研究では村落スケールの

農業システムを扱うことが殆どなかった。中国農村研究でもこうした空間論的分析を行った論考は極めて少ない。こうしたことから、関中平原・祝家荘の肥料用土の獲得・利用に関する聴取調査は、中国農業史研究・中国農村研究にとって極めて貴重な調査事例を示したと考えている。

註

(1) 渭河平原、渭河盆地、渭水盆地、関中盆地とも呼ばれる。

(2) 土糞は厩肥の一種とされる。実際には土・人糞尿を堆積・発酵させた肥料も土糞と呼ばれる。土糞原料の種類やその割合は地域・農家によって異なる。土糞以外の名称を用いる地域もある。土糞の肥料分の地域的差異は表一に示す。

(3) 乾燥有機質土壌の吸水量は小麦稈の二二・七%、同じくアンモニアの吸収量は三八八・二%である(孫一九五七・二二五)。アンモニアウイオンの吸着は土粒が細かいほど多くなる(北京农业大学一九八〇・二四六・二四七)。土の窒素保持効果は表二に示す。

(4) 柱などの重要箇所や炕に煉瓦を用い、大部分の壁面に土坯を用いた。目地材・塗壁材にはセメントや土を用いた。

表1 土糞の養分含有量 [%]

名称	地域	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
土糞	河北邢台	0.32	0.29	0.92
土糞	河北南宮	0.29	0.42	0.84
猪圈糞	河北武安	0.27	0.16	0.66
圈糞	河北衡水	0.12	0.14	0.44
麦稈糞	山西平遥	0.18	0.29	0.52
咯渣糞	山西長治	0.22	0.18	0.73
雜糞	山西洪趙	0.20	0.18	0.80
玉米稈糞	山西臨汾	0.27	0.21	0.79
土糞	山東坊子	0.29	0.21	0.52
土糞	山東臨清	0.23	0.34	0.98
土糞	河南南邱	0.53	0.60	1.07
土糞	河南荷沢	0.17	0.20	0.81

[孫 1957 : 281] を改変。

表2 土の窒素保持効果 [%]

	堆積前		堆積 45 日目		N 損失率
	N	C/N	N	C/N	
豚糞のみ	0.99	12.3	0.69	12.4	30
土糞 (土 66.7%)	0.30	12.3	0.26	11.3	13

[中国科学院北京地区有机肥料组 1961 : 6] を改変。

(5) 老房土、陳墻土、地皮土は硝酸塩類を多く含むことから、「硝土」に分類される。硝酸塩類の含有量は年月を経るほど増加した。便所・畜舎付近には特に多かった。なお、磚坯房・坯房の土壁、土墻は、毛細管作用の制限によって、硝酸塩類がそれらの下部に蓄積した。老房土・陳墻土の肥料分は表三に示す。

(6) 炕土は「熏土」(有機物を土で覆って加熱し、炭化させた肥料)に分類される。その肥料分は建材の土質、土

表3 老房土・陳墻土の肥料分 [ppm]

	N			P ₂ O ₅	K ₂ O
	NO ₃ -N	NH ₄ -N	合計		
老房土 (家屋築 6 ヶ月)	20	41	61	91	108
老房土 (家屋築 20 年)	296	36	332	83	1513
老房土 (家屋築 40 年)	464	100	564	71	1648
老房土 (家屋高さ 7 尺)	18	37	55	93	286
老房土 (家屋高さ 6 尺)	8	53	61	69	222
老房土 (家屋高さ 2 尺)	296	36	332	83	1513
老房土 (家屋高さ 1 尺)	396	64	460	76	1003
老房土 (豚小屋)	563	20	583	108	1904
陳墻土	857	47	911	184	1128
現地棉作土壤	12	12	24	81	77
現地棉作土壤	7	16	23	56	124

[中国农业科学院土壤肥料研究所 1962 : 137,138] を改変。
湖北農業科学研究所による分析。

炕の形状、土炕内の位置によって異なる (北京农业大学、
山东农学院一九六一・二〇二)。煤煙の吸着量は年月を経
るほど増加した (表四)。

表4 炕土の窒素・燐酸含有量の経年変化 [%]

使用年数	N	P ₂ O ₅
1	0.22	0.24
2-3	0.35	0.71
5	0.32	0.71
10	0.44	0.73
12	0.46	0.73
20	0.56	0.70

[北京农业大学、山东农学院 1961 : 201] を改変。
西北農学院による分析。

- (7) 純収入の総和を農村常住人口で平均した数値。
(8) 当時は土地所有権が個人に属していたため、自由に土
地を売買できた。しかし、その価格については聴取で
きなかった。
(9) 鎮政府から岐青公路まで南北に伸びる祝南のメイン
ストリート。
(10) A によれば、トラクター一台分の積載量は架子車一〇
台分に相当する。
(11) A によれば、大車一台分の積載量は架子車六台分に相
当する。

(12) 湧地：周囲の雨水を集積した小型溜池。降水量の少ない冬季は水が涸れる。湧地には自然形成のものと人造のものがある。「機井」(ポンプ井戸)や水道水が普及する前、湧池の水を生活用水として利用した。

(13) 入手先については聴取できなかった。村外から購入する特殊な土壌の可能性と自ら採取する一般的な黄土の可能性がある。

(14) Bによれば、トラクター一台分の積載量は架子車五、六・二五台分に相当する。また、大車一台分の積載量は架子車五台分に相当する。

(15) Dによれば、大車一台分の積載量は架子車六・七台分に相当する。

(16) Eによれば、大車一台分の積載量は架子車六・七台分に相当する。

(17) Fによれば、大車一台分の積載量は架子車四台分に相当する。

引用文献

日本語

栗山知之 二〇〇九 歴史資料としての土壌…渭河平原西部、祝家荘における調査成果 史学、七八(一、二) … 一一一～一三七

任美鏐編、阿部治平、駒井正一訳 一九八六 中国の自然地理 東京…東京大学出版会

中国語

北京农业大学、山东农学院主编 一九六一 农业化学 第一

册肥料 北京…农业出版社

北京农业大学编 一九八〇 农业化学 总论(第二版) 北京…农业出版社

龚子同等 一九九九 中国土壤系统分类…理论・方法・实践 北京…科学出版社

岐山县志编纂委员会编 一九九二 岐山县志 西安…陕西人民出版社

岐山年鉴编纂委员会编 二〇〇一 岐山年鉴一九九八—一九九九(创刊号) 岐山…岐山县档案局

岐山年鉴编纂委员会编 二〇〇三 岐山年鉴二〇〇〇—二〇〇二 岐山…岐山县档案局

岐山年鉴编纂委员会编 二〇〇四 岐山年鉴二〇〇四 岐山…岐山县档案局

岐山年鉴编纂委员会编 二〇〇五 岐山年鉴二〇〇五 岐山…岐山县档案局

陕西省革命委员会气象局气象台 一九七三 陕西逐日降水资料 资料 一九七五 陕西省逐日气温资料 关

中 陕西省气象局资料室 一九七五 陕西省逐日气温资料 关

陕西省气象局资料室 一九八四a 陕西省逐日气温资料 (关中) 一九七三—一九八〇年

陕西省气象局资料室 一九八四b 陕西省逐日降水资料 一九七三—一九八〇年

孙羲 一九五七 农业化学 北京…高等教育出版社

杨周勤 一九八三 肥料资源考察报告 (岐山县农业区划委员会编) 陕西省岐山县农业综合区划报告集

浙江农业大学主编 一九八〇 农业化学 上海・上海科学技术出版社

中国科学院北京地区有机肥料组 一九六一 猪粪 土壤、一九六一(一)・四・九

中国农业科学院土壤肥料研究所主编 一九六二 中国肥料概论 上海・上海科学技术出版社

【謝辞】

調査を実施するにあたって、祝家莊の方々に御協力を賜りました。また、流通経済大学の原宗子教授、佐藤孝雄教授を始めとした慶応義塾大学民族考古学研究室の皆様、西北農林科技大学の樊志民教授には、懇篤な御指導と御助言を賜りました。併せて御礼申し上げます。